

明治神宮薪能四十年誌

明治神宮薪能四十年誌編集委員会編

明治神宮薪能四十年誌発刊のごあいさつ

明治神宮薪能実行委員会会長 佐藤 禎一



明治神宮薪能が、節目の四十年を迎え過ぎることができました。これはひとえに、明治神宮様をはじめ能楽関係者の方々の多大なご尽力、「安藤・間」の皆様のご支援の賜であり、心から感謝いたしますとともに、厚く御礼を申し上げます。

また、これを記念する本誌の発刊にあたり、皆様からご祝辞や貴重なご寄稿を賜りましたことに衷心より御礼申し上げます。

明治神宮薪能は、明治神宮にほど近い千駄ヶ谷の地に、国立能楽堂が新築されることを機縁に、明治天皇陛下、昭憲皇太后陛下が深くお心を寄せられた能楽を奉納することを趣意とし、あわせて日本の伝統文化の継承と発展の一助になればとの願いのもとに始まりました。昭和五十七年十一月三日（旧制明治節）に、第一回目のご奉納として『翁』（金春信高師、山本東次郎師）の祝儀祝福で薪能は開幕いたしました。

これらの企画立案の中心は故増田正造先生であり、その後も先生のご指導の下に会を重ねてまいりました。この機会に先生に深甚なる感謝の意を捧げたく存じます。

昭和、平成、令和と三代にわたる奉納を続けてまいりましたこと、また、これまでに多くの国内外のご来賓および広く一般の方々にご覧いただけたことは、日本の伝統芸能の精華である能楽の振興に、いささかなりとも資するものであったものと確信いたしております。

能楽は世界無形文化遺産であります。私は、日本政府ユネスコ代表部特命全権大使として、無形遺産条約の成立に奔走いたしましたので、能楽が、平成十八年に、第一回ユネスコ無形文化遺産に登録された時は、感無量でありました。能楽はいまや世界の人々からその価値が継承されることを望まれている日本を代表する無形文化財なのであります。

私ども委員会はこの四十年余の歴史を本誌にまとめ、これまでのご奉納の記録や皆様から寄せられた貴重な玉稿を資料として残したく、今回の企画をいたしました。

これまでのご奉納の歴史の上に立って、今後も明治神宮薪能を大切に守り育て、五十回、百回と引き継いでいくことをお願いいたしております。皆様には、今後とも温かいご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。ご挨拶の結びといたします。

発刊のごあいさつ

株式会社 安藤・間 代表取締役社長 国谷 一彦



明治神宮新能は、昭和五十七年に奉納行事として発足し、以来、皆様のご声援に支えられ、四十周年を迎えることができました。長く協賛してきた者として喜びにたえません。

この間、ご指導ご支援賜りました明治神宮をはじめ能楽五流の御宗家および能楽界の方々、関係各位に心から御礼申し上げます。

また、四十年誌発刊にあたり、皆様から過分の労いや貴重なご寄稿を賜りましたことに、厚く御礼を申し上げますとともに、皆様の玉稿を拝読し、能楽関係者の皆様の温かいご理解、ご協力により明治神宮新能が継続していることを改めて感じた次第です。

明治神宮新能は、弊社（当時間組）が渋谷区千駄ヶ谷の国立能楽堂建設工事を仰せつかったことが機縁となり、能楽の普及・発展を目的に奉納行事として企画し、明治神宮のご好意で実現したものです。以来、毎年二千名の観客をお迎えしており、広い層の方々に能楽を親しんでいただく機会が増えたことは、日本の伝統文化振興のうえでとても素晴らしいことだと存じます。

深い森に囲まれた明治神宮拝殿前は、新能の環境として最高の場所であり、野外能の美しさは、一度ご覧になった方は誰もがその魅力に取りつかれてしまうことでしょう。今でもとても多くの方から観覧希望の申込みがあることは大変ありがたいことです。

毎回素晴らしい演技で観客を魅了しています新能ですが、五流輪番が最大の特徴であり、第一回から第四十一回まで番組を企画されてきた故増田正造先生（武蔵野大学名誉教授）の功績は大変大きいものと考えます。四十年の間には当社の経営が大変厳しい時期もございましたが、歴代社長の「明治神宮新能だけは途絶えさせはならない」との意思はいつの時代も継承され、また関係者の熱意に支えられ、唯一無二の文化貢献活動として定着しました。

グローバル化が進む社会において、日本人であれば日本の伝統文化や精神を学び、守っていく必要があると感じています。能楽は、室町時代からの日本の伝統文化であって世界に誇る芸術であり、今後永く伝承されていかなければならないものとして、明治神宮新能が、その一助になることを心から念じております。

明治神宮の神域で繰り返される新能をいつまでも皆様に愛していただき、今後も育てていただきたいと思います。存じますので、どうぞ、今後とも温かいご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。私の挨拶とさせていただきます。

目次

あいさつ

明治神宮新能実行委員会会長 佐藤禎一	2
株式会社 安藤・間 代表取締役社長 国谷一彦	3

明治神宮新能 四十周年に寄せて(一)

明治神宮宮司 九條道成	8
二十六世観世宗家 観世清和	10
金春流八十一世宗家 金春憲和	11
宝生流第二十代宗家 宝生和英	12
金剛流二十六世宗家(重要無形文化財保持者(各個認定)) 金剛永謹	13

写真でたどる四十年

第一回から第四十一回の舞台写真	16
能楽写真家協会会員 三上文規	62

明治神宮薪能 四十周年に寄せて(二)

シテ方観世流(重要無形文化財保持者(各個認定))	梅若桜雪	64
シテ方喜多流	塩津哲生	65
脇方下掛宝生流十三世宗家(重要無形文化財保持者(各個認定))	宝生欣哉	66
小鼓方大倉流十六世宗家(重要無形文化財保持者(各個認定))	大倉源次郎	67
狂言方大蔵流	大蔵彌太郎千虎	68
狂言(重要無形文化財保持者(各個認定))	野村万作	69

明治天皇と能楽

「能楽御覧」	72	
「壁画」画題考証図(能楽御覧)	73	
明治天皇と能楽復興	74	
横浜能楽堂芸術監督・明治大学大学院兼任講師	中村雅之	74
明治天皇御覧能(青山御所能舞台) 一覽	77	

四十年の足跡をたどる

明治神宮薪能 第一回開催の思い出	80	
ハザマ社友会理事	小飯塚眞彦	80
会場設営から開演前までの風景	83	
株式会社安藤・間	古賀俊臣	83
株式会社安藤・間	木野敏久	83
年度別番組総覧 第一回～第四十一回	86	
明治神宮薪能上演曲一覽	105	

増田正造氏追悼

早稲田大学名誉教授	竹本幹夫	110
武蔵野大学名誉教授	リチャード・エマート	110
能狂言研究家	小田幸子	111
公益財団法人河鍋晚齋記念美術館理事・館長	河鍋楠美	111
『花もよ』編集長	小林わかば	112
伝承文化研究センター所長	林和利	112
公益財団法人日本伝統文化振興財団顧問	藤本草	113
シテ方金春流能楽師	高橋忍	113
藝能学会副会長	児玉信	114
くらしき作陽大学客員教授	田中英機	114
明治神宮薪能アシスタントディレクター	浦亜希子	115
増田正造氏略歴		116
明治神宮薪能実行委員会		117
あとがき		118

明治神宮薪能四十周年に寄せて（一）



ごあいさつ

明治神宮宮司 九條 道成



この度、明治神宮薪能が四十周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。

貴会は、毎年二千名を超える方々を御神前の篝火灯る浄闇のなか、森巖幽邃の世界にいざなう薪能の奉納をもって、能楽の振興は元よりわが国の伝統文化の継承に大きく貢献されて来られました。茲にご歴代役員と各流御宗家、ご協賛の株式会社安藤・間の皆様方の敬神のまごころと弛みないご努力に深く敬意を表する次第です。また当初より常任委員としてご尽力され、昨年三月に惜しまれつつ逝去されました能楽研究家の増田正造先生のご生前のご功績を改めてお偲び申し上げます。

顧みますと薪能は、昭和五十七年に明治天皇御生誕百三十年記念として、当時、親王殿下であらせられた今上陛下のご臨席の下に奉納され、以後、昨年の明治天皇御生誕百七十年の佳節に至るまで明治神宮における秋夜の恒例行事となっております。そもそも明治神宮が薪能の舞台となるについては、当神宮の戦後復興にご尽力された株式会社安藤・間様（当時株式会社間組）とのご縁を語らねばなりません。

昭和二十年、当神宮は空襲によって主な社殿群を失う災禍に見舞われました。その際、間組第三代社長神部満之助氏は、間組本社社屋焼失の痛手を負いつつ、私益

を顧みず「日本の再建の第一歩は明治神宮から」と戦後第一号工事として仮社殿造営工事を申し出られました。この復興に捧げられた無私の赤誠が株式会社安藤・間様と明治神宮との機縁となりました。その後、株式会社安藤・間様は日本の新時代を拓く数多の大工事を手がけられるなかで、同五十五年の国立能楽堂施工を通じて伝統が有する深みと重みを改めて認識され、能楽を初めとする日本文化の発展を祈り薪能奉納の願いを出されました。明治天皇様の御一代を描いた聖徳記念絵画館の壁画の一枚に天覧能を描いた「能楽御覧」がありますが、明治天皇様が能楽のご復興に御心をかけられた由緒から、当神宮も株式会社安藤・間様の奉納に賛同申し上げます。上げた次第です。

かかる御神縁のもと、明治神宮新能が四十周年という節目を迎えられましたことに、明治天皇昭憲皇太后両御祭神もさだめし御嘉納遊ばされていることと拝察致します。

明治天皇御製

いそのかみ古きためしをたづねつつ新しき世のこともさだめむ

グローバル化の進む現代社会において、貴会が今後も古きよき日本のこころをたずね、先人が営々と築き上げた遺風を継承しつつ、益々発展されることを心から祈念申し上げます、お祝いの言葉と致します。

二十六世観世宗家 観世 清和

此度は 明治神宮新能四十周年 誠にありがとうございます
四十年の長きに渡り開催されました事 偏に明治神宮様をはじめ ご関係の皆様
深いご理解と 株式会社安藤・間様の多大なるご支援の賜物と 衷心よりお祝いを
申し上げます

昭和五十八年第二回新能にて 先代二十五世観世左近元正が『葵上』を勤めさせて
戴いて以来 先代私息子と 三代に渡り御奉納をさせて戴きました事は大変光栄に
存じます

申すまでもなく 古来より新能は 薪の神事と謂れ 薪を焚き 神に祈りを捧げ 自然
に感謝を致す宗教儀礼でございます

都心の喧騒とは一線を画す 先人達が作り上げた「神宮の杜・永遠の杜」の素晴らしい
自然環境の元 御祭神の御前にて御奉納させて戴きます事は 伝統文化を現在に
そして未来へと継げられる 明治神宮様への感謝の気持ちを心に 身を引き締めて勤め
させて戴いて居ります

元より明治神宮様と当家とは 御縁深く 年始の恒例行事として 昭和十七年より
今日まで 拜殿にて御奉納謡初をさせて戴いて居ります

敗戦の翌年昭和二十一年一月五日 先代家元を中心に流儀楽師が集い 御皇室の弥栄
と戦後復興を祈念し 仮設奉納所にて御奉納をさせて戴いたと聞き及んでおります

その様な経緯もあり 私共は 格別な思いで臨ませて戴いて居ります

殊に第一回より第四十回記念まで 実行委員としてご尽力されました 増田正造先生は
先代家元とは同年齢でございます 公私に渡り良き理解者として ご交誼を賜わりま
した事 この場をお借り致しまして感謝を申し上げますと共に 謹んで哀悼の誠を捧げ
させて戴く次第でございます

最後になりましたが 改めまして明治神宮 中島精太郎 名誉宮司様 九條道成宮司様
はじめご関係の皆様方 株式会社安藤・間様へ 心よりの敬意を表させて戴きまして
ご挨拶とさせていただきます



撮影 鍋島徳恭



金春流八十一世宗家 金春 憲和

この度は明治神宮新能四十周年、誠におめでとうございます。

金春流と明治神宮新能のお付き合いは、私の祖父、信高が能楽協会の会長をしていた時に、国立能楽堂が作られ、その建設を間組さんがなさっていた事から始まったそうです。間組さんの明治神宮と能楽に対する熱心な思いを、祖父と相談しながら形作られたのが、明治神宮新能なのです。

第一回が一九八二年十一月三日、祖父の能『翁』から始まったのは、そういった事情からでした。ちなみに私は一九八二年二月二十七日生まれなので、当時の記憶は当然ありません。

そんな私が初めて出演させて頂いたのは、第十四回での仕舞『田村』のシテでした。当時まだ中学生で、人前で仕舞を舞うのも数回目だったと思います。空が段々と暗くなっ

て行くのを、緊張しながら眺めていた記憶があります。

第十八回では、弟の政和と一緒に仕舞『小袖曾我』を勤めました。弟との共演は、何だか嬉しいような恥ずかしいような複雑な気持ちでした。弟はその後、能楽師の道には進まなかったのですが、社会人の経験を生かし、今では金春円満井会の理事として裏方で我々を助けてくれています。

第三十五回では素謡『翁』を謡いました。全国色々な神社で翁を謡わせて頂く機会が多いのですが、神前で謡うと、とても清々しい気持ちになります。その清々しさを観客の皆様と共有出来れば、この上ない喜びであると思いが、当神宮でも勤めました。

同じ回の能『鞍馬天狗』には娘の初音が子方の牛若を勤めました。前場で台詞を間違えてしまい、泣きそうになっている娘を中入りしている間に何とかなだめて後場に送り出しました。自分の子供が出る舞台は、自分が出る時の何倍も緊張します。最近息子の子方を勤める機会が増えたのですが、やはり緊張しますね。

初回から明治神宮新能にご尽力され、二〇二二年三月に急逝された増田正造先生には、色々な会で解説をして頂きました。その豊富な知識とウィットに富んだ話術を楽屋で拝聴するのが毎回楽しみでした。謹んでお悔やみ申し上げます。

祖父が始め、能楽五流全体で育んできた明治神宮新能が、今後も皆様の期待にそえる形で続いていく事を心より願っております。



この度は明治神宮新能が四十周年を迎えられましたこと、誠におめでとうございます。お祝いを申し上げるとともに、昨年三月に逝去されました増田正造先生への感謝の気持ちを含めて先生との思い出をお話したいと思います。

増田正造先生には、能楽の歴史のみならず映画やドラマなど映像における能楽の活用方法もご指導いただきました。先生は、伝統を重んじながらも新しい挑戦を怠らず、能楽師の生き方にも通ずるその姿勢は私にとって大事な手本となっております。

特に明治神宮新能において、今から十一年前の二〇一二年当時、シテ方宝生宗家に就任したばかりの私をお引き立ていただきましたこと、大変ありがたいことと感謝の念に堪えません。若輩者の私に対しても丁寧に対応してください、嬉しかったことをよく覚えております。

その後、二〇一八年に『小鍛冶』の能で明治神宮新能では初めて一人で能を勤めさせていただいた際には、日頃の精進の成果をお褒めいただき、大変恐縮しておりました。そのときのことや昨日のように思い出されます。

先生は老若隔てなく気さくに接してくださいさるお方で、若手能楽師にとってもこのような素晴らしい人格の先生がいらっしゃることがなによりも力となります。能楽界において重要な方でありました。

先生にお教えいただいたことを心に刻み、これからは常に温故知新の精神を心にとどめ、分け隔てなく朗らかな後進への接し方を実践してまいることが先生への恩返しになると信じております。

現在、世界情勢が激しく変化するなか、今まで以上にその潮流に対応していかななくてはなりません。そのフラグシップとしてこの明治神宮新能を後世へ引き継ぐ必要があると思っております。明治神宮新能には、四十一年間名だたる能楽師たちが築き上げた重みを受け継ぎながら、四流ご宗家のご指導を仰ぎ、さらに同世代の次期宗家の皆様と手をとりあいながら勤めてまいります。

本年の明治神宮新能では、不肖ながら私が『杜若 沢辺之舞』を勤めることとなり、その決意を舞台に込めて上演いたします。

今後とも明治神宮新能の益々のご発展をお祈り申し上げます。

金剛流二十六世宗家（重要無形文化財保持者（各個認定）） 金剛 永謹



此の度、明治神宮新能が四十周年を迎えられましたことを心よりお慶び申し上げます。
明治神宮新能は、昭和五十八年に国立能楽堂が竣工されるのを記念して第一回が開催され、中秋を彩る幽玄美溢れる新能として人気を博し、全国の新能の先駆けとして実に四十年という長きに亘り連綿と続けてこられました。様々な時を経たこれまでの歴史を思い起こしますと深い感銘を受けますと共に、ご関係者の皆様方の並々ならぬご尽力に改めまして心より敬意を表する次第です。

明治神宮新能での初めての金剛流の演能といたしまして、昭和六十年に、『雪雪踏拍子』を私の父 金剛巖が勤めさせていただきました。私も父について出演させていただきましたが、東京の都心とは思えない深い緑に囲まれた自然あふれる霊験あらたかな佇まいと、篝火が灯された幻想的な雰囲気はまさに別世界でありました。ご祭神の御前で演能できますことは何よりも得がたい喜びであり、感謝の念に父も私も満ち満ちておりました。其の後も度々演能の機会をいただき、ぴんと静かに張り詰めた厳かな靈気の中、舞台上に立たせていただくことにいつも身の引き締まる思いしております。

私の家の祖先である野村家は、江戸時代より京都で代々天皇家に仕える、いわゆる禁裏御用の能の家でした。明治神宮のご祭神である明治天皇の父帝孝明天皇には殊に手厚くご虫貞を賜り、当時の拝領の品々が当家に今も伝わっています。私の曾々祖父禎之助と、曾祖父謹之輔が幼い頃初めて御所の舞台上に上がらせていただいた時にご褒美として賜った初参人形は、年初めの謡初式などの祝事の折に飾らせていただいております。また孝明天皇より賜りました御自身の御寝着は能装束に作り替え、拝領の能の扇（中啓）や、皇女和宮様拝領の御自身の手ざしの鬘帯などと共に今でも特別な舞台の折に使わせていただいております。明治天皇ゆかりの明治神宮にて、現代もなおこのように文化を大切にいただきたきを舞わせていただきますとともに、先祖代々よりの有難いご恩を感じずにはおられません。

この四十年間を振り返りますと様々な時代がありました。昨今はコロナ禍によるパンデミックに加え、ウクライナ戦争や、豊かさとは裏腹の人々の心の荒廃など胸を痛めるような先行きの見通せない不穏な世の中に変わりつつあります。能は幾多の困難な時代を乗り越え、六百五十年以上も演じ続けられてきましたが、いつの時代も一貫して人間の弱さ、儂さ、醜さ、尊さなど人の心の中を深く見つめて、神仏への祈りによる救いを描いてきました。このような混迷した時代にこそ、神仏に手を合わせ、人知を超えたものの見方が大切だと痛感しております。明治神宮新能が今後益々隆盛に発展していかがれますことを感謝の念と共に心より祈念致しております。

写真でたどる四十年



- ・番組の詳細は年度別番組総覧をご覧ください。
- ・出演者名は当時の番組名で表記しています。
- ・本章掲載の写真は全て、三上文規撮影。



第1回 昭和57年（1982）11月3日「翁」金春信高



夜の帳につつまれた、厳かな祝福の舞。

第1回 昭和57年（1982）11月3日「翁」金春信高



第1回 昭和57年（1982）11月3日「石橋 大獅子」観世喜之 五木田三郎

ライトアップされたアカマツの樹々が背景。華麗勇壮な獅子の舞。







第8回 平成元年（1989）10月10日「韃猿」山本東次郎 山本則秀



第8回 平成元年（1989）10月10日「鷲」宝生英雄



第9回 平成2年（1990）10月10日「翁」喜多六平太



第9回 平成2年（1990）10月10日「絵馬」金剛巖 廣田泰能 豊嶋三千春



第9回 平成2年（1990）10月10日「絵馬」金剛巖



第11回 平成4年(1992)10月10日「羽衣 盤渉」金剛巖



第11回 平成4年(1992)10月10日「天鼓 弄鼓之舞」片山九郎右衛門



第12回 平成5年（1993）10月10日「黒塚 雷鳴ノ出」金春信高



第13回 平成6年（1994）10月10日「素袍落」茂山千之丞



第12回 平成5年（1993）10月10日「鷺」喜多六平太



第14回 平成7年（1995）10月10日「紅葉狩 紅葉ノ舞 群鬼ノ伝」
横山紳一 高橋忍 辻井八郎



第14回 平成7年（1995）10月10日「紅葉狩 紅葉ノ舞 群鬼ノ伝」
金春信高 金春安明 富山礼子 島原春京



第14回 平成7年（1995）10月10日「紅葉狩 紅葉ノ舞 群鬼ノ伝」金春信高



第15回 平成8年（1996）10月10日「千切木」山本東次郎 山本則俊 山本則孝 若松隆 山本則秀 山本則重 山本修三郎 加藤元



第15回 平成8年（1996）10月10日「大般若」前 観世清和



第15回 平成8年（1996）10月10日「大般若」後 梅若六郎



第16回 平成9年（1997）10月10日「土蜘蛛 千筋之伝」後 金剛永謹



第17回 平成10年（1998）10月10日「福の神」大藏彌右衛門



第18回 平成11年（1999）10月10日「清水」野村万蔵



第18回 平成11年（1999）10月10日「葛城」金春安明



第19回 平成12年（2000）10月7日「養老 水波之伝」前 観世清和



第20回 平成13年（2001）10月6日「佐渡狐」山本則俊 山本則秀 山本則孝



第20回 平成13年（2001）10月6日「泰山府君」豊嶋三千春



第20回 平成13年（2001）10月6日「泰山府君」豊嶋三千春



第21回 平成14年（2002）10月5日「靱猿」野村万作 野村彩也子



第21回 平成14年（2002）10月5日「高砂」佐野萌（宝生英照代演）



第22回 平成15年（2003）9月27日「二人大名」善竹十郎 大藏吉次郎 善竹大二郎



第22回 平成15年（2003）9月27日「金札」金春安明



第23回 平成16年（2004）10月9日「蝸牛」山本東次郎 山本則重



第23回 平成16年（2004）10月9日「松風 戯之舞」観世清和



第24回 平成17年（2005）10月10日「未広かり」
野村萬 小笠原匡



第24回 平成17年（2005）10月10日「絵馬」金剛永謹 片山峯秀 廣田泰能



第25回 平成18年（2006）10月9日「髭櫓」山本東次郎 山本則重 山本則秀 山本則孝 遠藤博義 加藤孝典 鍋田和宣 若松隆



第25回 平成18年（2006）10月9日「枕慈童」塩津哲生



第26回 平成19年（2007）10月7日「茸」三宅右近 高澤祐介 三宅近成 河路雅義 吉川秀樹 半田一智
三浦祐貴 志賀秀留 香取慧 倉田周星 高澤龍之助 三宅右矩



第26回 平成19年（2007）10月7日「自然居士」近藤乾之助



第27回 平成20年（2008）10月12日 仕舞「羽衣キリ」高橋汎



第27回 平成20年（2008）10月12日「棒縛」善竹十郎 善竹大二郎 大藏吉次郎



第28回 平成21年（2009）10月11日「二人袴」山本東次郎 山本則孝



第28回 平成21年（2009）10月11日「二人袴」山本東次郎 山本則俊 山本則孝



第28回 平成21年（2009）10月11日「三輪 二段神楽 彩色之伝」観世清和



第29回 平成22年（2010）10月11日 素謡「神歌」金剛龍謹 種田道一



第29回 平成22年（2010）10月11日「内外詣」金剛永謹



第30回 平成23年（2011）10月9日「翁」金春安明



第29回 平成22年（2010）10月11日「三本柱」野村万作 深田博治 高野和憲 月崎晴夫



第30回 平成23年（2011）10月9日「末広がり」大藏彌太郎 大藏基誠



第30回 平成23年（2011）10月9日「石橋 群勢」本田光洋 本田布由樹 中村昌弘 中村一路



第31回 平成24年（2012）10月8日「茶壺」野村萬 野村扇丞



第31回 平成24年（2012）10月8日「船弁慶 後之出留之伝」前 宝生和英



第31回 平成24年（2012）10月8日「船弁慶 後之出留之伝」後 辰巳満次郎



第32回 平成25年（2013）10月14日「玉井 貝尽」塩津哲生 友枝真也



第34回 平成27年（2015）10月12日「止動方角」大藏吉次郎 大藏教義 善竹十郎 上田圭輔





第35回 平成28年（2016）10月10日 素謡「翁」金春憲和



第35回 平成28年（2016）10月10日 「鞍馬天狗」金春安明



第36回 平成29年（2017）10月9日「未廣かり」野村万作 深田博治



第36回 平成29年（2017）10月9日 素謡「翁」梅若玄祥 山崎正道



第36回 平成29年（2017）10月9日 「養老 水波之伝」梅若紀彰



第37回 平成30年（2018）10月8日「髭櫓」善竹十郎 大藏吉次郎 善竹富太郎 大藏教義 宮本昇 榎本元 上田圭輔



第37回 平成30年（2018）10月8日「小鍛冶 白頭」宝生和英 宝生欣哉



第37回 平成30年（2018）10月8日「小鍛冶 白頭」宝生和英

第38回 令和元年（2019）10月14日「末広かり」野村又三郎 野村信朗



第38回 令和元年（2019）10月14日「枕慈童」友枝昭世



新型コロナウイルス感染防止対策のため、令和2～4年までは一般陪観は取り止めとし、外拝殿にて奉納を行った。



第39回 令和2年（2020）10月18日「猩々」金春安明



第39回 令和2年（2020）10月18日「福の神」山本東次郎



第40回令和3年（2021）10月11日「翁」観世清和 三宅近成



第40回 令和3年（2021）10月11日「翁」
笛 松田弘之 小鼓 大倉源次郎 田邊恭資 大倉伶士郎 大鼓 柿原光博



第40回 令和3年（2021）10月11日「祝言之式 高砂」観世鏡之丞



第41回 令和4年（2022）10月10日「福部の神」山本東次郎



第41回 令和4年（2022）10月10日「福部の神」山本東次郎 山本泰太郎 山本則孝 山本凜太郎



第41回 令和4年（2022）10月10日「加茂」金剛永謹 宇高德成





第41回 令和4年（2022）10月10日「加茂」金剛永謹

変わらぬもの

明治神宮薪能を撮りつづけて

初めての明治神宮薪能を目前にしたある日、薪能実行委員の増田正造氏から撮影を依頼された。以来四十年以上、人生の半分近くにわたって関わってきた。

過ぎてしまえばアツという間だが、この間に周囲の多くが変わった。演者は世代交代が進み、スタッフも人事異動で少しずつ入れ変わってきた。舞台や観客席に工夫が施され、照明や安全対策がよりきめ細かくなった。カメラのデジタル化でフィルムが撮像素子に変わった。

目立たないが広大な杜もゆっくりと変化している。当初は舞台周辺にアカマツが林立していた(17ページ写真参照)。夕焼けに浮かぶ巨木のシルエット、ライトアップされた濃緑の葉と赤茶の幹が印象的だった。特に舞台背後のアカマツはあたかも能舞台の鏡板のようだった。しかし、残念にも今はなくなっている。およそ百年前の植樹による人工の森から、天然の森へと移る自然林相の一過程なのだろうか。

目には見えないが、そんな移り変わりの中で全く変わらないものがある。それは芸能を奉納することで神をもてなす心だ。夕暮れの御苑に動植物がたわむれ、人間の弱みをもじる笑いの狂言。神域に響きわたる透きとおった謡や囃子の音色。闇の神苑に神々や霊獣が出現し、厳かな舞を繰り広げる能……。

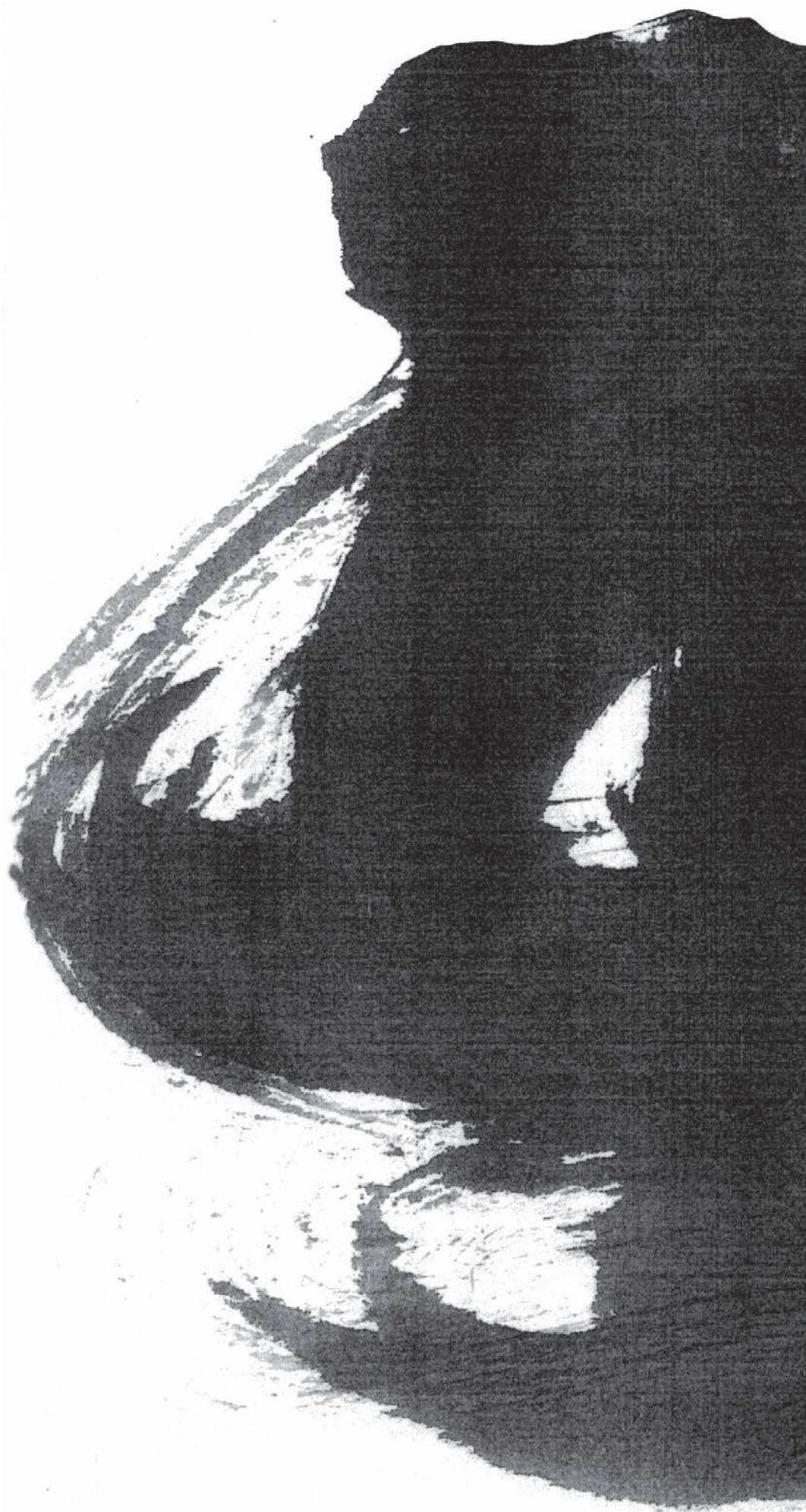
神に捧げるといふ芸能の原点に立った薪能。そこに集う人々がご相伴にあずかる贅沢な秋の一夜。これからも永く、いつまでも続くことだろう。

明治神宮薪能讚

能楽写真家協会会員 三上 文規



明治神宮薪能四十周年に寄せて（二）



『大般若』の思い出

シテ方観世流（重要無形文化財保持者（各個認定）） 梅若 桜雪



撮影 森山雅智

私をはじめ「明治神宮新能」に出演させていただいたのは平成八年、復曲能『大般若』でした。世話役をなさっておられた増田正造さんからお話をいただき、それも「是非、お家元（二十六世観世宗家観世清和氏）とやってほしい」とおっしゃるので、たいへんありがたくお受けしたことをよくおぼえています。『大般若』は、昭和五十七年にいまの「明治神宮新能」が開始されて以来、はじめて復曲・新曲の類の上演だったのではないのでしょうか。当時はこの曲の初演から十年ばかり経った頃で、私が復曲した作品の中では割と評判を得て、それなりに再演もされていきましたから、増田さんも「これならば」と推してくださったのでしょう。この時はお家元が前シテの老人をなさって、私が後シテの真蛇大王、ワキの三蔵法師は宝生閑さん。今となってはなつかしい思い出です。ところで、この復曲能『大般若』の初演は「明治神宮新能」が始まったのと同様に昭和五十八年、会場は国立劇場大劇場でした。それから能楽堂公演を経て、これまで全国各地で上演させていただきましたが、私の経験から申し上げますと、この曲は数ある能の中でも特に新能と相性がいいように思います。作品の傾向も内へ向かうというよりはスケールの大きい発散型で、野外のほうが思い切って出来ます。能本来の景色のようなものを見せられるとでもいいますか……。そもそも、この『大般若』がつけられた時代はまだ能が能として確立されていなかった頃ですから、そういう意味でもいまよりもっと自由なやりかたで演じられていたのでしょうか。実際にこの作品を復曲したことで、能の可能性とその生命力の強さを改めて目の当たりにしました。

それはそうと、増田さんと私との出会いはじつに特別です。私が十七歳で『道成寺』を披いた際に評を書いてくださったのですが、それがものすごい酷評で（笑）、でもそれが逆に増田さんと私とをひきつけました。それからは不思議なご縁で繋がって、数々の場面でご一緒させていただきました。増田さんはいつもエネルギーが豊富で、人が思いつかないような発想もたくさんお持ちになっておられましたね。この『大般若』でのお家元と私の共演なども、振り返ると増田さんらしいご提案だったと思いますし、なにより貴重な機会をいただいたことに感謝しております。

神々との邂逅

シテ方喜多流 塩津 哲生

明治神宮新能が四十周年を迎えられたよし、真に祝着至極に存じます。何事も長きにわたり続けることには多大なるエネルギーを要します。四十年も続く新能、全国的にみても稀有なこと、ご尽力された方々には心より敬意を表します。

二十年程前の新能ブームと言われた好時期には、全国各地の寺社境内、公園、丘、林の中のみならず、池や川面、海岸など、絶景、秘境と言われるところにまで舞台が設えられ、さまざまな特色を持った新能が催されました。

多くの経費と時間と手間をかけ、関わられた方達の熱い想いを結集して形を成している舞台。しかし当日、その時刻、お天気が崩れてしまえば全てが台無し、報われません。今も各地で催される新能、見に来て下さるお客様は、周囲に焚かれた篝火の中、常とは異なる景色の中に浮かび上がる、ゆらめく炎に照らし出された幻想的な舞台を楽しみに、晴天を念じて集われます。

私が平成十八年に明治神宮新能で『枕慈童』を舞わせて頂いた折に頂いた感想です。「神風と思われるような爽やかな芳しい風が上空を舞い、どこからともなくほのかな菊の香りが……。見上げた夜空には冴え冴えとしたお月さま。ご一緒に能を愉しんでおられる神々の存在を、身近に感じた得難い経験でした。」

まさに、都心の只中での、神々との邂逅。

日本の文化を護るためにも、明治神宮新能が、末永く継続されんことを念じてやみません。



明治神宮薪能を振り返って

脇方下掛宝生流十三世宗家（重要無形文化財保持者（各個認定）） 宝生 欣哉

明治神宮薪能が四十周年の節目を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。私が、明治神宮薪能に出演させて頂いた最初の舞台は、平成元年宝生英雄先生の『鷲』でございます。当時、二十二歳で、まだまだ能楽師としては未熟な時期にお役をつけて頂いたことを覚えております。

また、その四年後の平成五年喜多平太先生の『鷲』にも出演させて頂きました。いずれも、父（宝生閑）のツレでしたので、父と共に出勤させて頂く舞台であるというのが、明治神宮薪能の最初の思い出でございます。

明治神宮薪能にて、ワキとしてお役を頂戴したのは『玉井』が初めてであったかと思えます。『玉井』の詞章に「さてもわれ鹽土男の翁の教へに従ひ。わたづみの都に入りぬ。これに瑠璃の瓦を敷ける衡門あり。門前に玉の井あり。この井の有様銀色輝き世の常ならず。又湯津の桂の樹あり。木の下に立ち寄り。事の由をも窺はばやと存じ候」というワキ（彦火々出見尊）が兄から借りた釣針を探し求め、翁の言葉に従って、海神の都に向かい、その先の立派な門前に玉の井があり、隣には桂の木があった有様を謡っている場面がございます。

常の張り詰めた緊張感のある能楽堂で演じる際には感じ得なかった、神々の清らかな時の流れ、空気というような非日常的な感覚を明治神宮での自然に囲まれた舞台に感じ、進行していく物語に溶け込むような、実感を伴った気持ちの良い謡でございました。

また、『小鍛冶』もさせて頂きました。ワキは三条小鍛冶宗近でございます。一条天皇の勅命により御剣を所望されますが、相槌を打つ者がなく、進退きわまり神力を頼むほがなく、氏神である稻荷社に参詣いたします。自邸にて壇を飾り、専念祈誓すると、稻荷明神の眷属が現れ、相槌を打ち、無事に一振りの剣、小狐丸を完成させます。

『玉井』とは、また異なる華やかさのある能ですが、やはり御神前という清々しい舞台で、心から神に祈りを捧げる役をさせて頂く喜びがございました。

明治神宮薪能では、『鷲』をはじめ、『玉井』『養老』『小鍛冶』と、厳かで清浄な美しい舞台で演ずるにふさわしい曲目に若年の頃より、度々出演させて頂いたことを、大変光栄に思います。

結びに当たりまして、公演関係者の皆さまが一層発展されますこと、明治神宮薪能が益々多くの皆さまに親しまれ、五十年、六十年と末長く続いていきますことを、心から祈念いたしております。



明治神宮薪能四十周年記念に寄せて

小鼓方大倉流十六世宗家（重要無形文化財保持者（各個認定）） 大倉源次郎

神は森におはしますという言葉が都内で体感できる数少ない聖地として明治神宮の存在意義は大きい。先ずはこの奉納を立ち上げられました故増田正造様・佐藤禎一様を始めとする運営の御苦労に、そして継続に際しての演能関係者、スタッフ、特に主催者の皆様に感謝御礼とお祝いを申し上げます。

日本は神代に素戔嗚尊が詠まれた『八雲立つ……』の歌より今上陛下の歌会始『コロナ禍に友と楽器を奏でうる喜び語る生徒らの笑み』（令和五年正月）に繋がる和歌の伝統の柱を持ちます。この和歌の世界を主軸にする文学が『万葉』『伊勢』『源氏』そして『平家』と連なる詩歌文学を育て更に戯曲化されて能楽が大成されました。これらに連なる大いなる意志は、歌を詠むことで現れる様々な心のあり様で、『言霊』に育まれた日本の姿であると考えます。

この神宮奉納にて大御心に思いを寄せ覚醒し正しい歴史を次世代に引き継ぐ責務が現代を生きる我々には有ると考えます。願わくは次代を担う若き能楽師を一人でも多くこの奉納に出演させて頂き、日本の共生精神——天皇陛下と共に百姓（おおみたら）が共に働き助け合う国造りを実感させて頂く奉納として継続され、奉仕奉納の原点を今後も世界に示して頂けることを切に願っております。

この奉納に集う人々が日本に目覚め日本人として世界に日本の心を広めて行く意志が大切と考えるからです。

生涯十万首の歌を詠まれた明治天皇の歌は、何れも国民を思い、世界の平和を願う人々の幸せに心を寄せられた歌と伺っております。

詠人知らずの歌から選ばれた国歌『君が代』と、日露開戦に詠まれた『四方の海皆はらからと……』の歌は和合を唱える素晴らしい歌であるにも関わらず消し去りたい過去という論者も居ます。さりながら歌の本意とは裏腹に政治利用され、多くの悲劇を生んだ事を忘れない為にも、この両面を語り歌い継がれるべき歌で有ると私は確信しております。なぜなら能楽（能と狂言）は数々の物語を上演し、架空であるが故にこの世ならぬものが現代を生きる私たちと能舞台で出合う事で時空間を超えて通じ合い、未来に悲劇を繰り返さない為の鎮魂と祝祭の藝能だからなのです。

安藤ハザマの皆様のお陰で続けられる明治神宮奉納に、名前に隠された歴史に有縁と無縁が集い、奉仕と奉納の心が全国の藝能に戻ります様、皆様の益々のご発展をお祈り申し上げます、お祝いの言葉とさせて頂きます。



明治神宮薪能四十周年に寄せて

狂言方大蔵流 大藏彌太郎千虎

明治神宮薪能四十周年おめでとうございます。

さて、四十年という年月を振り返りますと、祖父（故大藏彌右衛門虎智）が健在だった時代が思い出されます。

当時のお番組を見ますと、最初に勤めさせていたのは昭和五十九年（一九八四年第三回）狂言『鎌腹』。大藏彌太郎（廿五世）、大藏基義（現吉次郎）、善竹圭五郎、大藏基嗣（現廿六世）と、それぞれが襲名をする前で、私にとっては懐かしい文字列で御座います。当時の私は十歳ですが、厳格な祖父も、実弟である善竹圭五郎という楽屋では朗らかな雰囲気であったと楽屋風景が思い出されます。

私自身の明治神宮薪能の初参加はそれから六年後の平成二年（一九九〇年第九回）、喜多流『翁』。父の三番三で、私は千歳を勤めています（当時 基照）。

時代は平成へと移り、祖父は彌太郎から彌右衛門に、父は彌太郎に、叔父は吉次郎を襲名した直後だったかと記憶しています。

当時、私は高校生。狂言は父から教えてもらい、祖父に一度見てもらう、というのが普段のお稽古の流れでしたが、祖父から直接三番三の事を教えてもらったのもこの頃でした。

そこからさらに二十一年後、平成二十三年（二〇一一年第三十回）に金春流『翁』で三番三を勤めさせていただきました時は、祖父、父へのいろいろな思いがあった事を思い出します。（当時 千太郎）

三番三には百八つの習いがありまして、『揉ノ段』では天に向かって声を発し、天の神様の恵みを受け、『鈴ノ段』では鈴の音色で地の神様の怒りを鎮めて天の神の恵みを地の神に伝えます。天地人の審神者の役を務めますが、祭壇を拵えて皆が神聖な場所を大事にする事で、そこに神様が顕われる。精進潔斎・別火をして三番三を勤めるのは今でも大事に守っています。

幼少期・基照から青年期・千太郎へ、そして現在彌太郎へと、この寄稿を書く事で私の四十年も振り返る良い機会となりました。今後の益々のご発展をお祈り申し上げます。



神宮の薪能と増田君

狂言（重要無形文化財保持者（各個認定）） 野村 万作

明治神宮の薪能が四十一回の奉納を終えられたとの事、誠に長い光陰を感じます。薪能としては比較的小じんまり故、観客と舞台との交流が成り立ち易い。又、能舞台に辿りつくまでの、神宮ならではの周囲の環境は、当然すがすがしいものです。四十年の歳月を継続された関係者の御努力に感謝申し上げます。

さて、薪能のプロデューサーの立場で、解説者でもあった増田正造君のことですが、三月十九日（令和四年）に急逝されたと聞き、誠に驚きました。彼は様々な場での解説でよく言っていました。「万作君とは大学の同級で同じクラスだった」と。大学生の頃、細川邸内の名人・桜間弓川先生のお宅へ稽古に通う増田君について行った事もあり、又学生の能楽大会で『小袖曾我』の能を舞った彼のすばらしい演技も、私が間狂言を演つたので心に残っています。

彼は学者というよりは、能のプロデューサーという側面を強く持っていました。「能楽音のライブラリー」を作り「華の会」（観世流分家兄弟、三役の集まり）の同人となり、不肖・私が主演した新作の『榎山節考』の企画者でもありました。又、札幌や熊本に能楽堂を作る運動もやっていました。「能と近代文学」との関連を書いた論文などで、法政大学観世寿夫記念能楽賞を受けた側面もありましたが、録音テープや写真を通して能の記録を残す仕事もしていました。

しかし、残念ながら何故か、いつの間にか、私ばかりでなく、能楽界と疎遠になり、能楽堂の見所にも殆ど姿を見せなくなりました。

そんな中で、ずっと力を入れて続けてこられたのが、明治神宮の薪能だったのでしょいか。四年程前に、山形県の酒田で能があった時、久しぶりに増田君に会いました。庄内の能楽資料館の館長をしていた時があり、私もその組織と昵懇で狂言を何度も演じていたのでした。ホテルの朝食の折に、久しぶりに昔のあれこれを親しく話したのが最後でした。

明治神宮薪能の継続、発展を願うと共に、増田正造君の急逝を悲しまずには居られません。

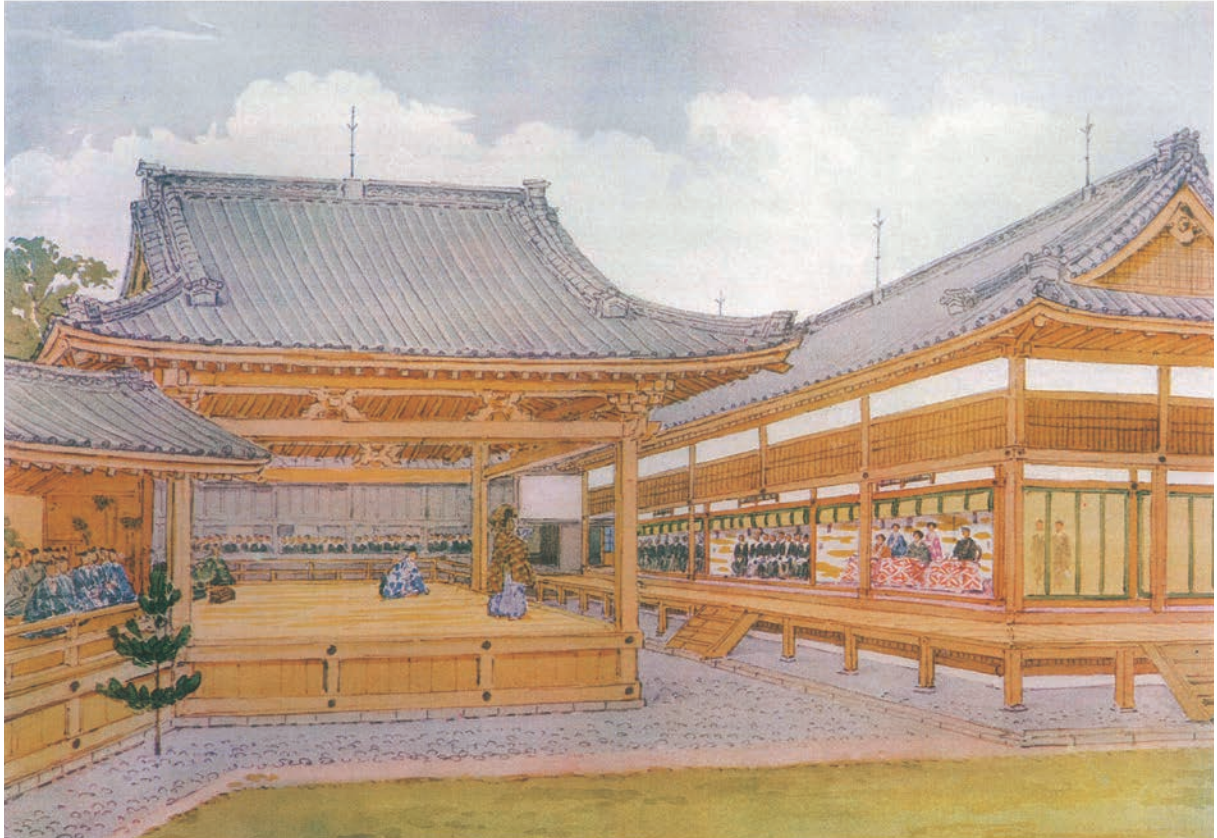


明治天皇と能楽





「能楽御覧」 画 木島櫻谷 (聖徳記念絵画館所蔵)



「壁画画題考証図（能楽御覧）」画二世五姓田芳柳（『明治神宮叢書』第20巻図録編所収）

明治天皇と能楽復興

横浜能楽堂芸術監督
明治大学大学院兼任講師

中村 雅之

「能」と言うと、「武家の式楽」とされた事から、天皇にとっては縁遠いような印象を受けるかもしれないが、その様な事はけしてない。

能の背景にあるのは、『源氏物語』『伊勢物語』などの王朝文学や和歌・漢籍といった平安時代から続く教養。「武家」と言っても、将軍や大名の教養は、貴族文化を基盤としていた。つまり、文化的な基盤は、武家も公家も共通だったのだ。

長く能の中心は京都にあったから天皇にとっても馴染み深い芸能だった。江戸時代に入ってから、天皇の即位の折りなど、宮中では頻繁に能が催されていた。地付きの役者や京都詰めのお藩のお抱え役者が、「禁裏御用」という形で出入りしていた。

幕末の頃に入入りしていた現在のシテ方・金剛流宗家や狂言方大蔵流・茂山千五郎家には、「初参」、つまり初めて御所に上がった幼子が、拝領した「御所人形」が残っている。

内裏の能舞台

天皇が坐した「内裏」は、幾度も火災に見舞われ、その度に再建されるという繰り返しだった。明治天皇が、東京に移るまで座していたのは安政二（一八五五）年再建の「安政度内裏」だ。

「安政度内裏」には、能舞台が少なくとも二つ存在していた。とは言っても独立した建物ではない。一つは、内裏の真ん中辺りにあった板張りの「囲炉裏ノ間」に設けられており、通常は鍵番などの詰所として使われていた。もう一つは、親王や大臣が参内する時に使う「参集殿」

の一角の畳を上げると、橋掛り付きの舞台が現れるという構造になっていた。現在は「京都御所」と呼ばれている「安政度内裏」の建物には、この舞台の痕跡が残っている。

文久元（一八六一）年三月二十四日、「参集殿」の舞台で、能が演じられ、という記録がある。孝明天皇が「天覧」し、睦仁親王（後の明治天皇）、「准后」（後の英照皇太后）、天皇の異母妹である「和宮」が陪覧した（『明治天皇紀』文久元三月二十四日の条）。

どちらの舞台だったかは解らないが、同年九月二十七日にも、和宮が宣下を受け、「親子内親王」となった事を祝い、能が催されている。この時も、睦仁親王は陪覧している（『明治天皇紀』文久元年九月二十七日）。

明治二年、明治天皇は、東京へ移った。天皇は、京都に残して来た嫡母・英照皇太后の事を気遣い、「囃子・能狂言等の御覧」を勧めている。皇太后の能好きを踏まえての事だった。しかし皇太后は、天皇が多忙を極めている時に、「独り遊楽に耽るべきにあらず」と辞退した。（『明治天皇紀』明治三年四月二十八日の条）

天皇は、戯に謡を女官たちに教えたりもしている。

『明治天皇紀』には、「明治天皇亦能楽を好み謡曲をも謡はせたまふ、但し天皇の謡曲は所謂耳學にして、特に習ひたまへるにあらざれば、素より御堪能とは申し難し、されど興に乗じたまひては、時々獨吟あらせられ、又女官等を召して玉音高らかに之れを教へたまふ事ありしと云う」と記されている。（『明治天皇紀』明治九年四月四日の条）

「天覧能」

明治天皇は、明治四（一八七二）年から、維新に功績があった旧大名・公家や士族の邸宅への行幸を始める。始め、余興は無かったが、やがて放鷹や鴨猟が披露されるようになる。

明治九（一八七六）年四月の二度目の岩倉具視邸行幸の際、初めて能が催された。東京で初めて、そして明治天皇にとっても、即位後初の「天覧能」だった。

天皇が京都にいた頃、「天覧能」は、特段注目を集めるものではなかった。ところが、天皇の権威の復活と共に、一躍、世間の注目を集めるようになる。

「天覧能」が決まると、逐次、新聞でも報じられた。

『明治天皇紀』には、「天覧能」当日の様子が次のように記されている。「午前十一時、右大臣岩倉具視の馬場先門内の邸に幸す、具視、能楽師梅若實・同観世鍊之丞・同宝生九郎等をして能楽を演ぜしめ以て天覧に供す」。『明治天皇紀』明治九年四月四日の条

梅若實ら玄人に交じって、腕に覚えのある旧大名も舞台上に立った。間に狂言を挟みながら、旧大聖寺藩主・前田利暲が『小鍛冶』、利暲の父で旧加賀藩主・前田齊泰が『橋弁慶』、当時を代表する名人・梅若實が『土蜘蛛』、そして最後に宝生流宗家の宝生九郎が番外で『熊坂』の半能を演じた。太政大臣・三條實実を筆頭に、新政府の要人たちが勢揃いして陪覧した。

「天顔殊に麗し」とあり、天皇は、頗る上機嫌だったようだ。

翌日の五日には皇太后と皇后、六日には落飾して「静寛宮」となっていた親子内親王ら親王・内親王と、連日、皇族が岩倉邸を訪れ、能を御覧になった。

その後、行幸の際には、能を催するのが慣例となり、この年だけでも二回行われた。五月五日には静寛宮邸で催され、梅若實、金剛流宗家

の金剛氏成らが出演。十月十三日には、明治天皇の外祖父に当たる中山忠能邸で、狂言ばかり十曲余りが演じられた。

「天覧」を切っ掛けに、維新を境に少なくなっていた能の上演が、再び盛んになる。中には、岩倉具視や毛利元徳のように、舞台を新たに建てた例さえあった。

地方での「天覧」

「天覧能」は、東京だけに止まらなかった。「六大巡幸」の一つに数えられる明治九（一八七六）年の東北・北海道巡幸では、北上の途中、七月四日に、岩手県平泉・中尊寺白山神社にある能舞台で、僧侶たちによって『竹生島』などが演じられた。中尊寺では、古くから能が盛んで、幕末に仙台藩・伊達家から寄進された風情ある茅葺の能舞台があった。

明治十（一八七七）年二月三日、京都へ行幸中だった天皇は、皇太后・皇后を伴い、京都御所に隣接する桂宮邸に伯母である桂宮淑子内親王を訪ねる。この時は、昼食をとった後、『翁』と『三輪』など能五曲を御覧になっている。他の皇族や九條道孝・近衛忠熙ら大勢が陪覧し、能が終わった後も夜遅くまで酒宴が続く盛大なものだった。

九日には、奈良に行幸し、東大寺で催されていた「奈良博覧会」を御視察の途中、休憩を兼ね、西廻廊で椅子に座り、金春流宗家の金春廣成が庭で演じる「石橋」を御覧になった。

青山御所の能舞台

明治十一（一八七八）年、天皇は、皇太后への孝養を尽くそうと、手狭だった青山御所の増築工事に併せ、新たに能舞台を建てさせる。

七月五日、天皇も行幸して舞台披きが行われ、金剛唯一（氏成が改

名)の『翁付養老』に始まり、狂言を挟みながら『小督』『道成寺』『正尊』『土蜘蛛』が演じられた。その反響は大きく、アツという間に世間を駆け巡った。新聞でも大々的に報じられ、様子を見る事など出来るはずもない絵師が想像を膨らませて描いた錦絵も売り出された。

シテ方の各宗家である観世清孝・宝生九郎・金剛唯一と梅若實、狂言方の三宅庄市の五人が「御用達」に命じられた。「装束料」として、五人に対し五年の間、能が催される毎に八十円が支給される事となった。別に三千円が前田齊泰に供託され、利子と合わせ、五年後以降の「装束料」に充てさせる算段だった。『明治天皇紀』には「是れ能楽再興の始にして、全く皇室の庇護に因る」と、その意義を記されている。〔明治天皇紀〕明治十一年七月五日の条)

その後も青山御所では、しばしば能が催され、天皇・皇后も行幸した。明治十四(一八八一)年、旧公家・大名を中心とした能の支援組織として「能楽社」が設立された。四月十六日には、その拠点として芝公園の一角に建てられた芝能楽堂の舞台披露が行われ、皇太后も行啓した。「御座所借料」として毎月三十円、行啓ごとに二百円が、皇太后から下賜される事になった。

それまでの神社・城・大名屋敷などにあった能舞台では、観客が座る「見所」は、庭を隔てて別棟。芝能楽堂は、舞台と「見所」が一体化した劇場形式で、初めての「能楽堂」だった。これによって、能は誰でも見る事が出来るようになる。ここから能の近代が始まったとも言っても過言ではない。

皇太后は、芝能楽堂に足繁く通う。それは、組織の再編に伴い、能楽会附属能楽堂と名を変えた後も合わせると、九年余りの間に、合計十九回にも及ぶ。

「天覧能」、青山御所の能舞台の建設、能楽社設立という、明治天皇を中心とした一連の動きの中で、維新によって幕府や藩の庇護を失い衰退傾向にあった能は、復興への足掛かりを掴む。



『青山仮皇居御能図』(法政大学能楽研究所蔵)

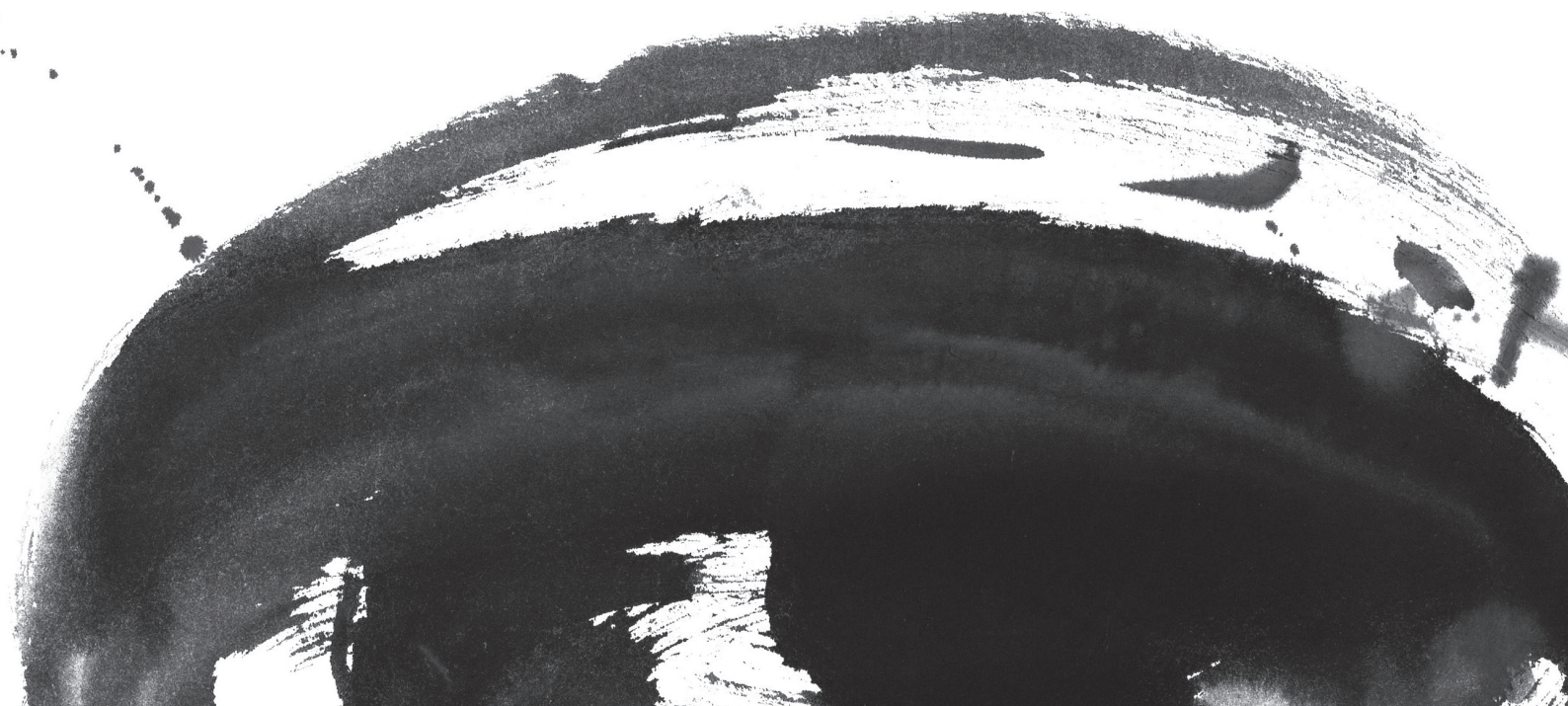
明治天皇御覽能（青山御所能舞台）一覽

※◎『能舞台歴史を巡る』建築画報社刊（青山御所能舞台御觀能一覽表）記 浅羽英男

元号	西曆	月日	御臨席	能楽	演者	狂言	演者	仕舞	囃子
明治11	一八七八	7月5日	天皇行幸御臨席 皇太后／御同座	第1回 翁・養老・小督・道成寺 第2回 正尊・土蜘蛛	観世清孝 金剛唯一・宝生九郎・梅若実 以上御用達	第1回 三本柱・棒縛・花子 第2回 千切木	三宅庄市 御用達等	／	／
明治11	一八七八	11月20日	天皇行幸御臨席 皇后行啓「御同座」 皇太后／	嵐山・小袖曾我・石橋	観世鏡之丞等	狸腹鼓・業平餅	野村与作 下野岩苔等	／	／
明治12	一八七九	12月19日	天皇行幸御臨席 皇后行啓「御同座」 皇太后／	巴・熊野・俊寛 望月・錦戸	梅若六郎 金剛泰一郎等	萩大名・繩綱 金岡・六地藏	山本東次郎 藤井芳松等	熊坂・宝生九郎 歌占・櫻間伴馬	三輪 善知鳥
明治13	一八八〇	4月26日	天皇行幸御臨席 皇后行啓「御同座」 皇太后／	放下僧・紅葉狩・亂 安宅・烏帽子折等 追加熊坂・羅生門	観世鏡之丞 金剛泰一郎 宝生九郎 彌石重五郎等	靱猿・蜘蛛人 釣狐・太鼓負 追加無布施経	藤井芳松 市川亮明等 三宅庄市等	六番演有 ／ （演目記述なし）	／
明治13	一八八〇	11月5日	天皇行幸御臨席 皇后行啓「御同座」 皇太后／	張良・叡・藤戸 鉄輪・禪師曾我	宝生九郎 彌石重五郎等	蚊相撲・拔殻・狐塚 雷・栗焼	野村与作 藤井芳松等	花筐・放下僧 龍虎・一調女郎花 松虫	盛久・舟辯慶
明治14	一八八一	7月6日	天皇行幸御臨席 皇后行啓「御同座」 皇太后／	八島・小督・景清 道成寺・熊坂 追加羅生門	金剛泰一郎 観世清孝等 金剛氏重等	墨塗・業平餅 犬山伏・唐人相撲	三宅惣三郎 三宅庄市等	／	追加 融
明治14	一八八一	12月16日	天皇行幸御臨席 皇后行啓「御同座」 皇太后／	春永・鉢木・殺生石・烏帽子折	金剛泰一郎 梅若実等	素袍落・寝音曲 不聞座頭	藤井芳松 三宅庄市等	玉之段・鶉之段 碓潜・熊坂・昭君 項羽・春日龍神	紅葉狩 ／ 宝生九郎等
明治15	一八八二	5月22日	天皇行幸御臨席 皇后行啓「御同座」 皇太后／	邯鄲・七騎落 外二番	櫻間伴馬 宝生九郎等	二人大名・蟹山伏外一番	大藏八郎 山本東次郎等	／	／

元号	西曆	月日	御臨席	能楽	演者	狂言	演者	仕舞	囃子
明治15	一八八二	6月20日	天皇行幸御臨席 皇后行啓「御同座」 皇太后「御同座」	知章・吉野静外三番 望月 敦盛・歌占 外六番	金剛唯一 金春広成等 櫻間伴馬等	夷大黒・鼻取相撲 外二番	山脇元清 三宅庄市等	山姥・田村 外四番 金剛唯一 梅若六郎	藤戸・歌占 梅若実 宝生九郎等
明治15	一八八二	11月13日	天皇行幸御臨席 皇后行啓「御同座」 皇太后「御同座」	能八番有竹生嶋 唐船 橋弁慶	金春広成 梅若実 観世鍔之丞・ 梅若六郎・櫻間伴馬・ 観世清孝・宝生九郎・ 金剛泰一郎	萩大名 外五番	山本東次郎 外野村與作 三宅庄市等 鷺権之丞	／	／
明治16	一八八三	5月23日	天皇行幸御臨席 皇后行啓「御同座」 皇太后「御同座」	鞍馬天狗 小袖曾我 東北 外四番	金春広成 観世清廉 宝生九郎等	狂言六番の内 末広がり	鷺権之丞	仕舞六番	／
明治16	一八八三	11月19日	天皇行幸御臨席 皇后行啓「御同座」 皇太后「御同座」	咸陽宮 実盛 山姥 外四番	観世清孝 櫻間伴馬 宝生九郎等	狂言六番の内 獅子舞	山本東次郎	仕舞三番	／
明治17	一八八四	11月19日	天皇行幸御臨席 皇后行啓「御同座」 皇太后「御同座」	春日龍神 夜討曾我 外三番	金春広成 片山晋三等	狂言三番の内 鉢叩	野村与作	仕舞三番	／
明治19	一八八六	6月14日	天皇行幸御臨席 皇后行啓「御同座」 皇太后「御同座」	小袖曾我 蝉丸外数番	(演者記述なし)	／	／	／	／
明治23	一八九〇	11月18日	皇后行啓「御同座」 皇太后「御同座」	(演目記述なし)	宝生九郎 観世清廉等	狂言有り	／	／	／
明治26	一八九三	10月9日	皇后行啓「御同座」 皇太后「御同座」	(演目記述なし)	宝生九郎 観世清廉等	狂言有り	／	／	／

四十年の足跡をたどる



明治神宮薪能 第一回開催の思い出

ハザマ社友会理事 小飯塚眞彦

敗戦による戦後の国体の姿がまだ明確にならない混迷の時代でした。戦前の日本軍国主義体制の解体をめざすGHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の方針もいまだ未知数でした。戦前に東宮御所の工事を拝命し皇室尊崇の念の篤い間組三代目神部満之助社長は、そうした圧力にも屈せず戦災で焼失した明治神宮御本殿の再建に向けて「仮御社殿」の造営を戦後第一号工事として拝命。その後の明治神宮の施設の全ての復興に携わってきました。

昭和五十七年（一九八二年）に完成する能楽界待望の「国立能楽堂」がわが社の手で鋭意、建築中でした。

当時日本土木工業会会長で間組六代目本田茂社長は昭和六十四年（一九八九年）に迎える百周年事業をめざし、昭和五十六年九月には広報部を新設。NHK、毎日新聞社、産経新聞社など各マスコミから実力者であった人材を招聘し戦略的な広報活動を開始しました。

毎日新聞社出身の橋戸雄蔵顧問から「増上寺で薪能を開催した経験があるのだから国立能楽堂を建築しているのだから、薪能をやったらどうか。」というご提案がなされ、有光次郎日本芸術院長、林健太郎国際交流基金理事長、犬丸直国立劇場理事長、五流ご宗家など各氏で構成した明治神宮奉納薪能実行委員会を発足させました。

また、当時武蔵野女子大学教授で著名な能評論家である増田正造先生や当時能楽協会理事長でおられた金春信高七十九世宗家など多くの能楽関係者の方々とご縁ができ、建築中の国立能楽堂の舞台や制作中の「鏡板」の松の絵なども見学させていただくなど深い交流が続きました。

明治神宮ご当局からも「明治天皇御生誕百三十年在位五十年」記念を

迎える奉納行事として十一月三日文化の日（明治天皇御誕生日でかつての明治節・祝日）は午前中宮内庁から勅使をお迎えする秋の例祭が行われ、午後は行事がなく開催できる希望が生まれました。またこの日は明治天皇のお加護で必ず快晴となるのお話もありました。

高澤信一郎宮司さまからご賛同をいただき、毛利義就禰宜さまから参道に多くの篝火台を配置して舞台まで神秘的な幽玄の世界を演出する案や、有光次郎氏、本田茂氏ふたりによる火入れ式などの厳肅な神事による式



第一回のチラシ

次第についてもご指導をいただきました。また明治神宮薪能の名を入れた提灯（大小各一對）の製作会社もご紹介いただきました。金春信高ご宗家の高弟である島原春京様ご所有の素晴らしい「組立式能舞台」をお借りすることができたのも幸運でした。

NHKから招聘した名アナウンサーの須田忠児（後のハザマ広報部長）氏は巫女さんの手で選んでいただく公開抽選方法や薪能当日の「火入れ式」から本番での司会進行役の大役を担当していただきました。

増田先生にご同行いただき緊張して五流ご宗家に面会し本田社長からの「ご出演のお願い文書」をもって参上しました。鎌倉鶴岡八幡宮、大宮氷川神社、赤坂氷川神社、平安神宮など薪能の運営などを見学したことも懐かしい思い出です。

昭和三十九年に作家立原正秋の作品「薪能」が芥川賞候補となり世の中に薪能に対する憧れの現象が満ち溢れ大きなブームとなっていました。当日は東宮御所から浩宮さま（今上陛下）がお見えになることが決ま

第一回パンフレットより



翁のかける聖徳太子作との伝承をもつ白式尉
背景は蜀江錦の面袋・秀吉の陣羽織と伝える
(金春宗家蔵)



三番三のかける黒式尉 (山本東次郎家蔵)



狂言面・福の神 (山本東次郎家蔵)

り、当日金春ご宗家から宮さまに、聖徳太子がつくり金春家の祖秦河勝に伝えられたという由緒ある「翁」の面をお顔につけられたという微笑ましいお話が披露されました。警備は皇宮警察が加わり一層の厳重の度を極めました。

大鼓（おおつづみ）の奏者は事前に両側の皮を外し炭火で乾燥させるのですが、うっかり天井の煙感知器の真下だったことに気が付かず、突如ベルが発報し皇宮警察が大勢踏み込んできた冷や汗ものの失敗談を思い出します。

南神門から塀に沿って神宮の森の高い赤松の木が健在で、照明スタッフのアイデアで下からライトを当て中の舞台から見ると、あたかも鏡板の松の絵のような印象深い背景となり好評でした。今は創建当時から松の木も寿命となり全てありません。

間組社員約三百名が各役割を分担しお招きした正装のお客様の衣装に篝火から飛ぶ火の粉を避けるための防災シートの「ひざ掛け」をお配り



会場にご来臨された浩宮さま（今上陛下）

し、終演後も見事なご誘導方法で薪能の余韻を感じている二千名のお客さまの気持ちを大切にお送り申し上げました。

「テニスラケットを抱えた沢山の女子学生などの若者を見た時、「薪能は成功したな」という大役を果たした感動でいっぱいでした。

最初からこの奉納薪能全体のコンセプトを高所からまとめ、とても美しい文章で演目の選択から解説までご指導いただいた増田正造先生の優

しさにここから感謝を申し上げます。

昨年三月に悲しい訃報に接し、心に大きな空白ができた思いを感じております。これからも毎年、明治神宮薪能にそっとお見えになってポケットから美酒をいれたスキットルを取り出して楽しそうに鑑賞しているお姿が夢に浮かんできて、涙の日々でございます。

誠にありがとうございました。

会場設営から開演前までの風景

株式会社安藤・間
古賀 俊臣
木野 敏久

明治神宮は、初詣の参拝者が日本一を誇り、また年間を通して国内外から多くの観光客が訪れる神社の一つである。新能開催日となる十月の「体育の日／スポーツの日」は、晴天率が高いこともあって毎年多くの参拝者でにぎわう。ちなみに第一回は文化の日（昭和二十三年に改称されるまでは「明治節」）に開催された。

新能の設営は、そのような神聖かつ人の往来が多い場所で、参拝を妨げずに本殿前に二千名を収容する仮設スタンドと能舞台を、一日程度で組み上げる。そして、上演後は深夜中に片付けを終えて、翌朝には普段通りの状態に戻さなければならない。ご神前であり当然ながら設営中の事故などがあってはならず、安全対策には最大限の注意が払われる。開催数か月前から明治神宮と綿密な打ち合わせを行い、当日の他イベントや結婚式などの与条件を踏まえた設営の計画をたて、工事同様に厳格な管理で作業がなされる。設営班は、安藤ハザマの建築職員を中心に、舞台、客席スタンド、電気、舞台照明、音響など複数の協力会社で編成され、設営スタッフだけでも百名を優に超える。

新能四十回のうちで中止したのは昭和天皇が体調を崩された第七回のみで、それ以外は絶やすことなく継続して開催されてきたが、初回から変わらず、安藤ハザマ職員自らが設営の中心となり段取りしている。

ここでは、会場設営から開演前の様子についてご紹介する。

能舞台

能舞台は、南神門と西神門の間の南西に設置され、事前に職員が墨だ



組み立て後の能舞台



中正面から能舞台をのぞむ

しをしておいたポイントに合わせて組み立てられる。舞台板は水分湿気を嫌い、途中で雨に降られるのが一番困るため、スポット天気予報を参考に、実施本部が屋外開催の最終判断を決定し、組み立てにとりかかる。橋懸りと揚幕の先には鏡の間が用意され、客殿の演者控え室に繋がっている。なお、開催当初はこの舞台の後ろには、鏡板の松のように、大きな赤松があったが、長寿の松も残念ながら現在はない。

客席スタンド

明治神宮新能に初めて訪れた人が最初に驚くのは、その客席数である。常設の能楽堂でも千名超える観客を収容する施設はない。明治神宮新能は、仮設ではあるものの、約二千名を収容する客席が設けられる。

客席スタンドと言うくらいで、単にイスを平置きしているのではなく、後席の観客が見やすいように、最大高さ百六十センチの雛壇式のスタンドが組み立てられる。作業は日の出の開門と同時に、能舞台や資機材を積んだ大型車両が苑内に入場し、東神門前に荷捌きヤードを設けて実施



前日深夜から仮設スタンドの組み立て
(安藤ハザマ 撮影)



設営には100名以上のスタッフが関わる

してきたが、平成二十八年度の第三十五回より、参拝者の安全配慮と当日の結婚式による作業中断を回避するため、前日深夜中に仮設スタンドの組み立てに着手し、当日昼間の作業量を減らす工夫をしている。客席スタンドは、能舞台に対して正面・中正面・脇正面の三つに分けて、本殿前の石畳いっぱいにつけていくが、参拝者のために本殿までの安全通路を確保のうえ、誘導係の職員を要所に配置して作業が進められる。設営が進む午後になると参拝用通路は更に狭くなるが、安藤ハザマの本業が建設業だけあって、参拝者の安全を最優先に、手際よく作業は進められていく。スタンド設営の難所のひとつは、本殿前の左右にある御神木の防護である。大きく育った御神木を傷付けないように、ネット等を用いながら枝葉を持ち上げるには細心の注意を払う。

続いてスタンドの手摺や足元照明が追加され、午後三時過ぎにもなるとイスが並べ終わり、最後に能舞台の前に胡床が並べられると、いよいよ設営は完了となる。

そして、案内係の職員が会場各所に配置され入場準備にかかる。客席スタンドの組み立てと並行して、能舞台へスポット照明を当てるための



かがり火の中、観客が入場



増田正造教授の番組解説

かがり火・入場

明治神宮の広大の森は、都心の真ん中にありながらも、周辺ビル等の明かりは届かず、日没後の苑内は濃い闇となる。その中で煌々と燃える薪明かりに照らし出される舞台の夢幻境は、まさに野外で行われる新能の醍醐味である。能舞台の周りでは4基のかがり火が焚かれる。それとは別に大鳥居から南神門の間の参道にも数基のかがり火が設置される。

日没で閉門し、参拝者の退場後、観客は係員に誘導されて、整列したまま会場まで移動する。この参道のががり火が、より厳粛な雰囲気をつくりあげ、否応なしに観客は期待感が高まる。そして、南神門をぐり、

照明タワーの組み立て作業が進められる。また回廊屋根の上にも照明を設置し、場内の明るさを確保している。設営中には、外国人観光客が薪能の準備の様子に驚いて、誘導係をつかまえて色々質問している光景をよく目にする。私たち以上に日本文化への関心が高く、伝統文化を伝える良い機会として、係員に英文の問答集を持たせるなど工夫をしている。

会場に着席して静かに開演を待つ。

番組解説

観客の入場が一段落し、開演十五分前になると、増田正造武蔵野大学名誉教授がマイクを持って舞台前に現れて、演目の解説が始まる。

これまで能楽の研究に尽力されてきた増田先生だけあって、時には会場の笑いを誘いつつ、独特の節回しで分かりやすく解説していく。愛好家だけでなく、初めて能楽を体験される観客もその世界観へ引き込まれる。最初は開演までの繋ぎ的に始めた解説であったが、気が付くと明治神宮新能の名物となり、それを楽しみにされる観客もいたくらいである。そのお姿がもう見られないと思うと残念でならない。

神火授与・火入れ式

解説が終わり、十八時になると、本殿内にある太鼓が鳴り響き、神火授与・火入れ式が始まる。神火とは、神職が古式（こしき）に則り火を



授与された神火の入場



火入れ式

式次第
一、 報鼓
一、 修祓
一、 玉串奉奠
一、 神火分火
一、 参進報鼓
一、 神火授与
一、 着火

鑽り出し、お祓いの上、ご本殿奥にお供えした神聖な火をさす。先ずは外拝殿において、火入れ式を行う実行委員会会長と安藤ハザマ社長による参拝と神火の分火が執り行われ、その間に、舞台上では舞台および観客の修祓が執り行われる。次に参進の太鼓が鳴り響くと、神火を持つ齋主を先頭に、実行委員会会長、安藤ハザマ社長が、観客席通路を通り、能舞台前に到着する。そして、二人が持つ松明に神火が着火されると、そのまま舞台周りにある4基のかがり火台に火入れが行われる。パチパチと音をたて、薪が煌々と燃えはじめると、舞台を照らす照明が点灯して、いよいよ開演となる（上演中のかがり火は白丁が約二時間付きっきりで番をする）。

最後に

十月は台風シーズンでもあり、雨天の場合には神宮会館にて開催される。中止ではなく、雨天開催が可能なのも明治神宮新能が継続できた理由の一つでもある。急な夕立に降られ、開場直前に係員総出で客席を拭いたり、天気予報が外れて準備途中からの雨で、神宮会館に急遽舞台を設営するなどのエピソードもある。全ての演目がおわると、余韻を楽しむ間もなく、観客の退場を確認後、速やかに撤収作業が開始される。概ね深夜一時くらいには、搬入された資機材が搬出されて、一連の撤収作業を終える。釘一本落としてはならないと、設営係員は境内の石畳全体を最終確認し、翌朝も苑内を一周して、清掃・点検作業を行い、設営班の長い一日はこうして終了する。ご紹介した設営作業には、明治神宮の総務、警備、施設管理の方々も早朝から深夜まで立ち会われている。明治神宮新能が今日まで無事に開催できているのは、ご祭神のご加護とともに、明治神宮関係者をはじめ、多くの方のご協力とご支援の賜物と深く感謝申し上げます。これからも、多くの方に明治神宮新能を安心して楽しんでいただくとともに、安全な設営と運営につとめてまいります。

（写真撮影／三上文規）

【会場設営の協力会社】

春京舞台、(株)シミズオクト、オフィスアール、(株)エクサート松崎、(株)盛備、大橋エアシステム(株)、新成建設(株)、ヒトヒト(株)、サコス(株)、(株)キックオフ、勝亦運送(有)

年度別 番組総覧

明治神宮薪能番組

昭和五十七年十一月三日(祭)
午後六時始 於明治神宮拝殿前

翁

翁 金春信高

二番三 山本東次郎
千歳 山本則俊

大鼓 亀井 実

小鼓 敷村鐵雄
宮増純三
宮増新一郎

笛 藤田朝太郎

後見 金春安明
横山神一

山本正保 瀬尾菊次
吉場広明 高橋 汎
市川博通 本田光洋

高橋 忍 守屋泰利

狂言 福の神

シテ 山本則直

アド 大島寛治
アド 中島 登

後見 大井栄蔵 地謡 山本 則俊
山本東次郎
遠藤 博義

赤獅子 五木山三郎

白獅子 観世喜之

半能 石橋

ワキ 大獅子

鑓木岑男

大鼓 亀井 実 太鼓 大江照夫
小鼓 穂高光晴 笛 中谷 明

後見 遠藤六郎
水島忠修

地謡 弘田裕一 小島芳雄
駒瀬直也 五木田武計

坂真次郎 平富信義

明治神宮薪能番組

昭和五十八年十月十日(祝)
午後六時始 於明治神宮拝殿前

羽

シテ 天人 金春信高

能 (金春流)

衣

替之型

ワキ 鑓木岑男

ワキワレ 細井昌文

安田昌文

登文

大鼓 大倉 正之助

小鼓 沢倉 壽

大鼓 江原 二夫

大鼓 増 庸照

大鼓 二夫

大鼓 横山高金

大鼓 山田橋春

大鼓 神光 安

大鼓 一洋汎明

後見 高瀬 橋尾 菊次

市川吉市 村本場川
仲正広博 男保明通

高橋 忍

高橋 忍

高橋 忍

棒

狂言 (和泉流)

縛

シテ 本能重吉

野村万作

アド 石野 田村 幸之雄

アド 石野 田村 幸之雄

アド 石野 田村 幸之雄

アド 石野 田村 幸之雄

アド 石野 田村 幸之雄

アド 石野 田村 幸之雄

アド 石野 田村 幸之雄

アド 石野 田村 幸之雄

アド 石野 田村 幸之雄

葵

シテ 六條屋忠尚の重

観世元正 久広

能 (観世流)

上

シテ 鑓木岑男

茂好 吉原 龜井 純忠 三雄

小鼓 常好

大鼓 石田 幸雄

大鼓 野武 村田 四志郎

大鼓 津親 親 田世世 和芳 芳清 忠安 伸頼

大鼓 観山 坂武 世階 井田 清信 音宗 和弘 重和

大鼓 観山 坂武 世階 井田 清信 音宗 和弘 重和

大鼓 観山 坂武 世階 井田 清信 音宗 和弘 重和

大鼓 観山 坂武 世階 井田 清信 音宗 和弘 重和

大鼓 観山 坂武 世階 井田 清信 音宗 和弘 重和

大鼓 観山 坂武 世階 井田 清信 音宗 和弘 重和

附祝言

明治神宮薪能番組

昭和五十九年十月十日(祝)
午後六時始 於明治神宮拝殿前

枕 慈 童

能 (宝生流)

宝生英雄
森 茂好
小森 常好
大倉 幸大
大倉 正之助
金 田 春 国
大五郎

豊好
大生 幸大
小生 幸大
大生 幸大
小生 幸大
大生 幸大
小生 幸大

鎌 腹

狂言 (大藏流)

大藏 弥太郎
大藏 基五郎
大藏 基五郎

紅 葉 狩

能 (喜多流)

大村 大作
大村 大作
大村 大作

安山 登征
杉山 昌光
野見 文政
細井 十郎
大藏 善十郎
大藏 善十郎

附祝言
佐々木 宗三
佐々木 宗三
佐々木 宗三

明治神宮薪能番組

昭和六十年十月十日(祝)
午後六時始 於明治神宮拝殿前

雪

能 (金剛流)

金剛 巖
豊 鳴十郎
大倉 正之助
大倉 正之助

田村 信一
田村 信一
田村 信一

蚊 相 撲

狂言 (和泉流)

野村 万之丞
野村 万之丞
野村 万之丞

野村 史良
野村 史良
野村 史良

船 弁 慶

能 (金春流)

高井 謙吉
高井 謙吉
高井 謙吉

野村 万之介
野村 万之介
野村 万之介

附祝言
横山 神光
横山 神光
横山 神光

明治神宮薪能番組

昭和六十一年十月十日(祝)
午後六時始 於明治神宮拝殿前

能 (觀世流)

親世 恭秀
田根 浩孝
觀世 清芳
世清 和宏

小袖曾我

能 (大藏基義)

大倉 正之助
大倉 増純三
藤田 大五郎

觀見 寺井 行栄
木月 子
中関 浅杉 浦重豊
島根 見重 祥重夫人
高関 角岡 久次
橋根 祥寛 弘六郎

狂言 (大藏流)

末広

大藏 弥太郎
善竹 圭五郎
大藏 基嗣
大藏 基義

能 (喜多流)

殺生石

女体

能 (喜多流)

喜多 長世
森 茂好
大藏 佃 良勝
小倉 鶴 沢 寿
大藏 觀世 元信
善竹 十郎

附祝言

明治神宮薪能番組

昭和六十一年十月十日(祝)
午後六時始 於明治神宮拝殿前

半能 (金剛流)

巴

能 (金剛流)

森 茂好
井島 正昭
柳 淳之介

大倉 正之助
大倉 沢 寿
大倉 正之助
大倉 一 隆 二

狂言 (和泉流)

井杭

和泉 元秀
柳 元彌

井上 佑一

能 (宝生流)

小鍛冶

白頭

宝生 英雄
森 常好
井島 正昭

大倉 柿原 崇志
小倉 幸 義太郎
大藏 觀世 元信
大藏 大五郎

附祝言

明治神宮新能番組

平成元年十月十日(祝)
午後五時五十分始 明治神宮拝殿前

菊慈童

遊舞之衆

観世清和

能(観世流)

ワキ助 鑄木 宗男

ウキツレ辰作 野見山 光政
ウキツレ辰作 高橋 正光

大鼓 柿原 崇志
小鼓 鶴沢 寿一
三味線 増藤 二

後見 武田 宗和
木川 学行
浅見 重好
関根 祥人
関根 尚浩
関根 知孝
武田 志房

高砂

仕舞(金春流)

金春 信高

高橋 忍
高橋 安明
金春 安明
横山 紳一
辻井 八郎

靱猿

狂言(大藏流)

シテ人名 山本 東次郎

テテ人名 遠藤 博義
アト役 山本 則俊
アト旗 山本 則秀

能(宝生流)

鷺

シテ名 佐野 玄宣
シテ役 宝生 英雄

ワキ役 森 茂好

ウキツレ辰作 高井 松男
ウキツレ辰作 佐々木 則之
ウキツレ辰作 王 藤和哉
ウキツレ辰作 宝生 欣哉
ウキツレ辰作 殿田 謙吉
ウキツレ辰作 森 常好

大鼓 亀井 忠雄
小鼓 増純 三
三味線 藤田 大五郎

後見 宝生 英照
寺井 良雄
殿 己 謙次郎
余 森 秀祥
波 迎 健男
中 村 孝太郎
亀井 保雄
高橋 正光
田崎 隆二

明治神宮新能番組

鎮座七十年大祭奉祝記念

平成二年十月十日(祝日)
午後五時五十分始 於明治神宮拝殿前

翁

喜多 六平太

大藏 耀太郎

能(喜多流)

大鼓 柿原 崇志
小鼓 古賀 裕己
三味線 藤出 大五郎

後見 東谷 敏三
内田 安徳
高橋 明
長島 茂
大村 定
谷 大生
粟谷 菊生
津 哲生

三本柱

狂言(大藏流)

シテ役名 大藏 彌右衛門

アト役名 善竹 十郎
アト役名 大藏 吉次郎
アト役名 眞船 道朗

後見 菅竹 圭五郎
石原 康志

半能(金剛流)

シテ役名 豊 嶋 二十春
シテ役名 廣田 泰能
シテ役名 金剛 藏

絵馬

ワキ助 籾木 岑男
ウキツレ辰作 野見山 光政
ウキツレ辰作 高橋 正光

大鼓 大倉 正之助
小鼓 増純 三
三味線 中谷 同和
後見 田村 信一郎
廣田 泰三
松野 洋樹
元吉 正巳
片山 神夫
坂本 立建
田島 幸稔
廣田 幸稔
豊崎 調三
清宮 正光

明治神宮薪能番組

平成三年十月十日(祝日)
午後六時始 於 明治神宮拝殿前

自然居士

シテ・尺八 横山 太一
シテ・鼓 金存 信高

能 (金春流)

シテ・尺八 鈴木 孝男
シテ・尺八 野見山 光政
ア・四門の者 野村 良介

大鼓 柿原 崇志
小鼓 鷗 沢 寿
笛 中谷 明

舞 守瀬 屋尾 泰菊 次利 越 巖 田 善 次 雄
井高 上 貴 次 雄
高橋 井 次 郎
金 橋 春 徳
高 橋 高 汎

狂言 (和泉流)

茸

シテ・尺八 野村 万之丞

ア・尺八の者
又兼くさびら

野橋 猪 西 堀 久 安 鈴 小 吉 野
村 本 倉 原 保 田 木 笠 積 村
良 勝 大 大 智 裕 克 龍 徹 原 史 高 介
介 利 介 輔 行 行 人 雄 志 匡 高 介

乱

シテ舞の 宝生 英照
能 (玉生流)

シテ・尺八 宝生 閑

舞 辰 高 巳 橋 満 次 郎 豊 彦 水 小 倉 上 健 大 順 郎 優 三 和
小鼓 宮 増 純 三 大鼓 親 世 元 信
笛 藤 田 大 五 郎

明治神宮薪能番組

平成四年十月十日(祝日)
午後五時五十分始 於 明治神宮拝殿前

羽衣

シテ・尺八 余剛 敏

能 (余剛流)

シテ・尺八 藤 和 哉

盤 涉

シテ・尺八 余剛 敏
シテ・尺八 藤 和 哉

大鼓 安 福 建 雄
小鼓 宮 増 純 三 大鼓 親 世 元 信
笛 藤 田 大 五 郎

舞 廣 田 泰 三
後 見 退 文 夫

舞 坂 元 正 津 巳
片 山 本 立 津 巳
神 純 弘 夫 朗 巴
廣 豊 金 城 石 降 輔
田 島 剛 石 幸 訓 水 三 三 輔

狂言 (和泉流)

附子

シテ・尺八 野村 万作

ア・本舞の者
ア・尺八 石田 幸雄

能 (親世流)

天鼓

能 (親世流)
能 (親世流)
能 (親世流)
能 (親世流)

能 (親世流)
能 (親世流)
能 (親世流)
能 (親世流)

能 (親世流)
能 (親世流)
能 (親世流)
能 (親世流)

附祝言

舞 柴 山 田 清 司 稔
舞 浅 野 見 慈 一
清 西 小 野 見 慈 一
水 村 高 二 夫 修 一
阿 浅 若 北 江 照 大
部 見 松 浪 晴 幸 政
信 真 龍 昭 之 湖 史 基

明治神宮薪能番組

平成五年十月十日(祝日)
午後五時五十分始
於 明治神宮拝殿前

能(常多流)

子方巻 塩津 圭介
シテ舞 喜多六平太

鷺

ワキ盛人 宝生 閑

ワキツレ大臣 宝生 欣哉

後臣 工藤 和哉

徒臣 井藤 鉄男

後臣 井島 正昭

奥かき 佐々木則之

奥かき 大日向 寛

問 山本 則直

大鼓 佃 良勝 大鼓 親世 元信
小鼓 幸 義太郎 笛 藤田大五郎

後見 長田 颯
栗谷 能夫

和谷 衡市 佐藤 章雄
狩野 了 栗谷 幸雄
地謡 栗谷 明生 栗谷 菊生
栗谷 充雄 高木 番一

狂言(天藏流)

棒縛

シテ次郎冠者 山本 則直
アド主 山本泰太郎
アド太郎冠者 山本 則俊

後見 山本 則孝

能(金春流)

前シテ巻女 金春 信高
後シテ鬼女

黒塚

ワキ阿闍梨 鍾木 峯男

雷鳴の出

ワキツレ後備 野見山光政

問 山本 則俊

大鼓 亀井 実 太鼓 大江 照夫
小鼓 鶴沢 寿 笛 中谷 明

後見 高橋 汎
横山 紳一

附祝言

地謡 山井 綱雄 吉場 広明
金春 徳高 本田 光洋
辻井 八郎 金春 安明
井上 貴覚 高橋 忍

明治神宮薪能番組

平成六年十月十日(祝日)
午後六時始
於 明治神宮拝殿前

火入れ式
仕舞

通小町

田崎 隆二

武田 孝史
小倉 敏克
渡辺他賀男
東川 光夫

素袍落

シテ 茂山 千之丞

アド 茂山あきら
アド 山本 則直

(休憩)

能(宝生流)

子方 東川 貴史
シテ 宝生 英照

船辨慶

後之出留之伝

ワキ 鍾木 峯男

ワキレツ 安田 登

ワキレツ 細井 昌文

ワキレツ 野見山光政

問 山本 則俊

大鼓 柿原 崇志 大鼓 親世 元信
小鼓 鶴沢 壽 笛 中谷 明

後見 武田 孝史
東川 光夫

附祝言 亀井 俊雄 渡辺他賀男
地謡 水上 優 田崎 隆二
小倉健太郎 小倉 敏克
野月 聡 朝倉 俊樹

第十四回 明治神宮薪能番組

平成七年十月十日(祝)
午後六時 始
於 明治神宮拝殿前

火入れ式

仕舞 (金春流)

田村

金春 徳和

熊坂

高橋 汎

狂言 (和泉流)

萩大名

シテ 野村 万蔵

アト 野村 良介
アト 野村 史高
後見 能村 品人

～休憩～

能 (金春流)

辻井 八郎
高橋 忍
後ツレ 横山 紳一
島原 春京
富山 礼子
前ツレ 金春 安明

シテ 金春 信高

紅葉狩

ワキ 鐘木 岑男
紅葉ノ舞 ワキツレ 高橋 正光
群鬼ノ伝 安田 登

間

野村 良介
野村 史高

後見 本田 光洋
瀬尾 菊次

台後見 河村 高
大塚竜一郎

附祝言

岩田 幸雄
芝野 善次
富樫 一成
白橋 純治

山井 綱雄
高橋 汎
吉場 広明
井上 貴覚

大鼓 岡川 純
太鼓 金春 国和
小鼓 宮増 純二
笛 一噌 庸二

第十五回 明治神宮薪能番組

平成八年十月十日(祝)
午後六時 始
於 明治神宮拝殿前

火入れ式

狂言 (大藏流)

主催者代表 日本芸術院院長 犬丸 直
協賛者代表 株式会社商社社長 松本 幹生

主 山本 則俊

太郎冠者 山本 則孝

立衆 若松 隆

立衆 山本 則秀

立衆 山本 則重

立衆 山本 修二郎

立衆 加藤 元

女 山本 則直

後見 大島 寛治

千切木

男 山本 東次郎

能 (観世流)

堂本 正樹 補綴
梅若 六郎 作曲・製作
金春惣右衛門 作詞

飛天 梅若 晋矢

飛天 会田 昇

龍神 角当 直隆

龍神 梅若 靖記

真蛇大王 梅若 六郎

老人 観世 清和

大般若

三藏法師 宝生 閑

眷属 山本 泰太郎

後見 木村 薫哉
平井 俊行

地謡 山中 貴博
小田切 康陽

松山 隆之

鷺川 潤

井上 燎治
松山 隆雄
角当 行雄
山崎 正道

大鼓 亀井 広忠

小鼓 鷓沢 洋太郎

笛 松田 弘之

第十六回 明治神宮新能番組

平成九年十月十日(祝)
午後六時 始
於 明治神宮拝殿前

仕舞(金剛流)

西王母

塚本 嘉樹
宇高 通成
地謡 金剛 永謹
廣田 泰能

狂言(和泉流)

二人袴

野村 萬齋
野村 万作
男 石田 幸雄
太閤通者 深田 博治
後見 竹山 悠樹

～休憩～

能(金剛流)

供 遠藤 勝賢
胡蝶 工藤 克
種光 今井 清隆
後シテ 金剛 永謹
前シテ 金剛 巖

土蜘蛛

千筋之伝

ワキ 鑓木 岑男
大鼓 国川 純
小鼓 宮増 純二
笛 藤田朝太郎

ワキツレ 安口 登
ワキツレ 野見山光政
ワキツレ 細井 昌文

替間 ささがに

石田 幸雄
深田 博治

後見 廣田 泰三
塚本 嘉樹

櫻本 健
清宮 正光
城石 隆輔
豊嶋 訓三
萩田 政位
種田 道雄
片山 峯秀
宇高 通成

第十七回 明治神宮新能番組

平成十年十月十日(祝)
午後六時 始
於 明治神宮拝殿前

火入れ式

日本芸術院院長 犬丸 直
株式会社副社長 大和 文哉

狂言(大藏流)

福の神

アト 宮本 昇
アト 大藏 教義

野島 伸仁
石原 康志
善竹 十郎
高橋 明

～休憩～

能(宝生流)

鶉飼

シテ 宝生 英照
ワキ 宝生 剛
大鼓 植原 崇志
小鼓 幸 清次郎
笛 一噌 庸二

大藏 吉次郎

後見 辰巳満次郎
山内 崇生

高橋 惠正
渡辺他買男
伊藤 浩史
寺井 良男
小林 香也
小林与志郎
小倉伸二郎
佐野 登

終演 八時二十分頃

第十八回 明治神宮新能番組

平成十一年十月十日(祝)
午後六時 始
於 明治神宮拝殿前

火入れ式

日本芸術院院長 犬丸 直
株式会社副社長 大和 文哉

仕舞(金春流)

小袖曾我

金春 憲和
山井 綱雄
金春 政和
高橋 忍
地謡 津井 八郎
井上 貴覚

狂言(和泉流)

清水

シテ 野村 万藏
アト 野村 良介
後見 野村 品人

～休憩～

能(金春流)

葛城

シテ 金春 安明

ワキ 鑓木 岑男
大鼓 植原 崇志
ワキツレ 高橋 正光
小鼓 鶴沢 速雄
ワキツレ 野見山光政
大鼓 大江 照夫
藤田朝太郎

加 野村 史高

後見 金春 信高
横山 伸一

芝野 善次
高橋 忍
山井 綱雄
高橋 汎
井上 貴覚
吉場 広明
高樫 成
辻井 八郎

附祝言

第十九回 明治神宮薪能番組

平成十二年十月七日(土) 午後六時始

火入れ式

日本芸術院院長 犬丸 直

於 明治神宮拝殿前

舞囃子(喜多流)

安宅

喜多 六平太

大鼓 柿原弘和
小鼓 宮増新二郎

笛 一噌隆之

地謡 門脇利尹

横山 弘 大島政允
高木香一

能

(親世流)

(休憩)

熊大 関根知孝

天女 観世芳宏

山神 観世芳伸

熊前 観世清和

勅使 森 常好

養老

水波之伝

大鼓 柿原弘和
小鼓 宮増新二郎

笛 一噌隆之

地謡 野村昌司

藤波重彦 武田尚浩
藤波重彦 武田尚浩

吉井基晴 角 寛次朗

野村昌司 浅見重好

上田公威 高橋 弘

後見 木月学行

寺井 栄

第二十回 明治神宮薪能番組

平成十二年十月六日(土) 午後六時始

火入れ式

日本芸術院院長 犬丸 直

於 明治神宮拝殿前

狂言(大藏流)

佐渡狐

シテ 養者 山本則俊

アド 舞後のお百姓 山本則秀
アト 佐渡のお百姓 山本則孝

能

(金剛流)

(休憩)

後ツレ天女 植田 泰三

シテ 後 泰山府君

シテ 前 天人

豊鳴 二千春

泰山府君

ワキ 極町中納言 和泉 昭太郎

大鼓 大倉 正之助 大鼓 金春 国和
小鼓 宮増 純三 笛 中谷 明

間花守 山本 東次郎

工藤 寛

後見 豊鳴 調三

豊鳴 幸洋

溝前 元 岩切 直次

大菅 義信 谷口 雅彦

都丸 一 田中 敏文

吉村 輝一 山口 尚志

(終了予定 八時半頃)

第二十二回 明治神宮薪能番組

平成十四年十月五日(土) 午後六時 開演
於 明治神宮拝殿前

火入れ式

日本美術院院長 犬丸 直

ツレ小倉 伸二郎

能
高砂

シテ宝生 英照

ワキ森 常好

ワキツレ 館田 善博

ワキツレ 則久 英志

間 深田 博治

大鼓 亀井 広忠
小鼓 亀井 俊一

大鼓 金春 國和
笛 一噌 隆之

後見 武田 孝史
大友 順

舞 亀井 雄二 東川 尚史

地謡 辰巳 孝弥

和久 莊太郎

小林 晋也

東川 尚史

澤田 宏司

辰巳 孝弥

和久 莊太郎

小林 晋也

東川 尚史

佐野 登

小倉 敏克

渡邊 他賀男

東川 光夫

狂言
鞆猿

大名 野村 万之介
猿 野村 万作

後見 小川 七作

地謡 高野 和憲

破石 晋照

太郎冠者 深田 博治
子猿 野村 彩也子

竹山 悠樹

高野 和憲

破石 晋照

(終了予定 八時半頃)

第二十二回 明治神宮薪能番組

平成十五年九月二十七日(土) 午後六時 開演
於 明治神宮拝殿前

火入れ式

日本美術院院長 犬丸 直

狂言
二人大名

大名 善竹 十郎

道通り 善竹 大二郎

後見 大藏 教義

能
金礼

シテ 金春 安明

ワキ 工藤 和哉

ワキツレ 梅村 昌功

ワキツレ 則久 英志

間

善竹 富太郎

大鼓 安福 光雄

小鼓 亀井 俊一

大鼓 金春 國和

笛 松田 弘之

後見 高橋 汎
横山 紳一

地謡 山井 綱雄

金春 憲和

本田 芳樹

山井 綱雄

井上 貴覚

金春 憲和

高橋 忍

本田 光洋

吉場 広明

辻井 八郎

第二十三回 明治神宮薪能番組

平成十六年十月九日(土) 午後六時 開演
於 明治神宮拝殿前

火入れ式

日本芸術院 犬丸 直

狂言 蝸牛

山伏 山本 東次郎

主 山本 則直

太郎冠者 山本 則重

能 松風

松雨 観世 芳仲

松風 観世 清和

哉之舞

藤箱 宝生 閑

兼之舞

通人 山本 泰太郎

大鼓 亀井 忠雄

小鼓 北村 治

笛 一噌 仙幸

後見 上田 公威
武田 尚浩

地謡 木月 宣行
清水 義也
藤波 重彦

浅見 重好
観世 芳宏
岡根 祥人

第二十四回 明治神宮薪能番組

平成十七年十月十日(月・祝) 午後六時 開演
於 明治神宮拝殿前

火入れ式

日本芸術院 犬丸 直
株式会社四国社長 新名 順一

狂言 末広かり

里番者 野村 萬

太郎冠者 小笠原 匡

後見 山下 浩一郎

手力 鎌命 廣田 泰能

天舞 女命 片山 峯秀

純 種田 道一

前シテ 切 金剛 水 謹
後シテ 天照大神

能 絵馬

物使 村瀬 純

従者 村瀬 提

藤葉の島の鬼 野村 扇 丞

後見 廣田 泰三
山田 純夫

地謡 田村 修
工藤 寛
遠藤 勝實

元吉 正巳
宇高 通成
豊嶋 三千春
坂本 立津朗

大鼓 佃 良勝 太鼓 小寺 佐七

小鼓 曾和 正博 笛 槻宅 聡

第二十五回 明治神宮薪能番組

平成十八年十月九日(月・祝)

午後六時開演

明治神宮拝殿前にて

解説 明治神宮薪能実行委員会 増田 正造

火入れ式 日本芸術院 犬丸 直
株式会社開根社長 新名 順一

仕舞(喜多流)

高砂 シテ 粟谷 菊生 地謡 塩津 圭介
粟谷 明生 粟谷 大作 大島 輝久

狂言(大藏流)

髭櫓

シテ(志) 山本東次郎

アド(奏) 山本 則重
アド(掛手) 山本 則秀 後見 山本 則直
立衆(女衆) 山本 則孝
立衆(女衆) 遠藤 博義
立衆(女衆) 加藤 孝典 平田 悦生
立衆(女衆) 鍋田 和宣 地謡 山本 則俊
立衆(女衆) 若松 隆 山本修三郎
笛 一噌 隆之
小鼓 森澤 勇司
大鼓 柿原 崇志
太鼓 観世 元伯
太鼓 観世 元伯

(休憩)

能(喜多流)

シテ 塩津 哲生

枕慈童
ワキ 森 常好 大鼓 柿原 崇志 太鼓 観世 元伯
ワキツレ 森 常太郎 小鼓 幸 清次郎 笛 一噌 隆之
ワキツレ 館田 善博
後見 粟谷 辰三 地謡 佐々木多門 谷 大作
狩野 了一 地謡 金子敬一郎 香川 靖嗣
佐藤 章雄 粟谷 菊生
内田 成信 粟谷 明生

第二十六回 明治神宮薪能番組

平成十九年十月七日(日)

午後六時開演

明治神宮拝殿前にて

解説 明治神宮薪能実行委員会 増田 正造

火入れ式 日本芸術院 犬丸 直

仕舞 高砂 佐野 幹 佐野 登
羽衣 前田 尚孝 地謡 今井 泰行
船弁慶 辰巳 和磨 小倉 健太郎

狂言 茸

シテ(山悠) 三宅 右近 アド(奏) 高澤 祐介

立衆(童) 三宅 近成
立衆(童) 河路 雅義
立衆(童) 吉川 秀樹
立衆(童) 半田 一智
立衆(童) 三浦 祐貴
立衆(童) 志賀 秀留
立衆(童) 香取 慧
立衆(童) 倉田 周星
立衆(童) 高澤 龍之助
立衆(童) 二宅 右矩

子方 高橋 愛

シテ 近藤 乾之助

能 自然居士

ワキ 宝生 閑 大鼓 國川 純
ワキツレ 宝生 欣哉 小鼓 幸 信吾 笛 一噌 庸二

問 三宅 近成

後見 水上 輝和 金 森 隆 晋 辰 巳 満次郎
高橋 亘 地謡 當山 淳司 武田 孝史
小林 晋也 今井 泰行
小倉 健太郎 佐野 登

付祝言

第二十七回 明治神宮新能番組

平成二十一年十月十二日(日) 午後六時開演
明治神宮拜殿前にて

解説 武蔵野大学 名誉教授 増田正造

火入れ式

東京国立博物館 館長 佐藤 慎一
株式会社開祖 社長 小野 俊雄

仕舞 羽衣 高橋 汎
野守 本田 光洋
地謡 辻井 八郎
吉場 廣明
高橋 忍
山井 綱雄

狂言 棒縛

シテ(次郎冠者) 善竹 十郎
アド(主何悪) 善竹 大二郎
アド(太郎冠者) 大藏 吉次郎

後見 大藏 教義

能 高砂

ツレ 金春 春憲和
シテ 金春 安明
ワキ 森 常好
小鼓 佃 良勝 大鼓 観世 元伯
ワキツレ 緒田 善博
小鼓 幸 清次郎 笛 中谷 明
ワキツレ 森 常太郎
開 善竹 富太郎

後見 本田 光洋
横山 神一
地謡 本田 芳樹
山井 綱雄
井上 貴覚
本田 布田樹
辻井 八郎
本田 芳樹
高橋 汎
高橋 忍

第二十八回 明治神宮新能番組

平成二十一年十月十一日(日) 午後六時開演
明治神宮拜殿前にて

解説 武蔵野大学 名誉教授 増田正造

火入れ式

東京国立博物館 名誉館長 佐藤 慎一
株式会社開祖 代表取締役社長 小野 俊雄

仕舞 橋弁慶 観世 芳伸
牛若丸 観世 三郎太
地謡 武田 宗典
上田 公威
浅見 重好
坂口 貴信

狂言 二人袴

シテ(尾山) 本 東次郎
アド(巻) 山本 則俊
アド(太郎冠者) 山本 則重
アド(程) 山本 則孝

能 三輪

シテ 観世 清和
ワキ 村瀬 純
大鼓 柿原 弘和 太鼓 観世 元伯
小鼓 曾和 正博 笛 一噌 隆之
開 山本 泰太郎

後見 上田 公威
武田 尚浩
地謡 木月 宣行
清水 義也 山階 彌右衛門
角 幸一郎 武田 宗和
藤波 重彦 観世 芳伸

第二十九回 明治神宮新能番組

平成二十二年十月十一日(月) 祝 午後六時開演

明治神宮拝殿前にて

解説 武蔵野大学 名誉教授 増田 正造

火入れ式 東京国立博物館 名誉館長 佐藤 禎一
株式会社間組 代表取締役社長 小野 俊雄

素謡 神歌 金剛龍譚 種田道一 地謡 片山紳弘 宇高 通成
雄島道夫 豊嶋 幸洋

狂言 三本柱 シテ 野村万作

アト 深田博治
アト 高野和憲
アト 月崎晴夫
後見 竹山悠樹
岡 聡史

ツレ 廣田泰能
シテ 金剛永謙
ワキツレ 杉江 元 大鼓 安福 光雄 太鼓 小寺佐七
ワキ 高安勝久
ワキツレ 相元正樹 小鼓 鶴澤洋太郎 笛 槻宅 聡

豊嶋幸洋
後見 廣田幸稔
山田純夫
地謡
遠藤勝實 坂本立津朗
元吉正巳 金剛 龍譚
見越文夫 宇高 通成
工藤 寛 田中 敏文

第三十回 明治神宮新能番組

平成二十二年十月九日(日) 午後六時開演

明治神宮拝殿前 (雨天の時は明治神宮会館)

解説 武蔵野大学 名誉教授 増田 正造

火入れ式 東京国立博物館 名誉館長 佐藤 禎一
株式会社間組 代表取締役社長 小野 俊雄

翁 翁 金春安明 千成 大藏 教義 大鼓 亀井 実
三番三 大藏千太郎 脇鼓 住駒 充彦 笛 藤田 次郎
小鼓 曾和 正博
脇鼓 曾和伊喜夫

後見 金春憲和 井上貴覚 高橋 忍
横山紳一 山中一馬 高橋 汎
地謡 山井綱雄 吉場廣明
政木哲司 辻井八郎

狂言 後見 大藏吉次郎
宮本 昇

狂言 末広がり シテ 大藏彌太郎

アト 大藏 基誠
アト 大藏吉次郎
後見 榎本 元

ツレ 中村 一路
ツレ 中村 昌弘
ツレ 本田布田樹
シテ 本田 光洋
群勢 藤 和哉
大鼓 柿原 弘和 太鼓 金春 國和
小鼓 鶴澤洋太郎 笛 槻宅 聡

半能 石橋 後見 金春安明 萩野将盛 高橋 忍
横山紳一 地謡 金春憲和 高橋 汎
本田 芳樹 山井綱雄 岩田幸雄 吉場廣明
台後見 大塚龍一郎 井上貴覚 後藤和也 辻井八郎

第三十二回 明治神宮薪能番組

平成二十四年十月八日(月・祝) 午後六時開演

明治神宮拝殿前

(雨天の時は明治神宮会館)

解説

武蔵野大学 名誉教授

増田正造

火入れ式

東山国立博物館 名誉館長 佐藤 禎一
株式会社 安藤 同 代表取締役社長 小野 俊雄

経政

金井 賢郎

地謡

亀井 雄二
金井 雄資
佐野 登

仕舞 祇王

和久壯太郎
東川 尚史

地謡

佐野 弘宜

清経

山内 崇生

地謡

辰巳満次郎
亀井 雄二
今井 基

狂言 茶壺

シテ 野村 萬

アド 野村 扇丞
アド 野村 万蔵

後見 野村太一郎

能 船弁慶

後シテ 辰巳満次郎

前シテ 宝生 和英

ワキ 森 常好
ワキツレ 森 常太郎

大鼓 亀井 広忠
小鼓 親世新九郎

太鼓 徳田 宗久
笛 一噌 庸二

間

小等原 匡

後見 山内 崇生
金森 良充

地謡

今井 基
佐野 登
佐野 弘宜
小倉 敏克
東川 尚史
金井 雄資
亀井 雄二
和久壯太郎

附祝言

第三十三回 明治神宮薪能番組

平成二十五年十月十四日(月・祝) 午後六時開演

明治神宮拝殿前

(雨天の時は明治神宮会館)

解説

武蔵野大学 名誉教授

増田正造

火入れ式

東山国立博物館 名誉館長 佐藤 禎一
株式会社 安藤 同 代表取締役社長 小野 俊雄

舞囃子 高砂

友枝 昭世

大鼓 亀井 広忠

太鼓 吉谷 潔

小鼓 鶴澤洋太郎
笛 一噌 隆之

塩津 圭介
金子敬一郎
長島 茂

友枝 雄人
栗谷 明生
茂

能 玉井

貝 尽

ワキ 宝生 欣哉

ワキツレ 大日方 寛

大鼓 亀井 広忠

太鼓 吉谷 潔

小鼓 鶴澤洋太郎
笛 一噌 隆之

間

文給貞の精

山本東次郎

山本 則重

山本 則孝

山本 則秀

後見 友枝 昭世

中村 邦生

地謡

内田 成信
栗谷 明生
狩野 了一
栗谷 能大
長島 茂
香川 靖嗣

友枝 雄人
大村 定

後見 友枝 昭世
中村 邦生

地謡

友枝 雄人
大村 定

附祝言

第三十三回 明治神宮薪能番組

平成二十六年十月三日(月・祝) 午後六時開演

明治神宮拝殿前

(雨天の時は明治神宮会館)

解説

武蔵野大学 名誉教授

増田正造

火入れ式

東山国立博物館 名誉館長 佐藤 禎一
株式会社 安藤 同 代表取締役社長 小野 俊雄

仕舞 清経

廣田 幸稔

地謡

熊谷 伸一
田中 敏文

鐘之段

今井 清隆

地謡

宇高 通成
遠藤 勝實

狂言 墨塗

シテ 三宅 右近

アド 三宅 近成

アド 高澤 祐介

能 井筒

シテ 金剛 水蓮

ワキ 宝生 閑

大鼓 國川 純

小鼓 鶴澤洋太郎

普 松田 弘之

後見 工藤 寛

廣田 幸稔

地謡

見越 文夫
山田 純夫
元吉 正巳
宇高 通成

坂本立津朗
今井 清隆

田中 敏文
今井 克紀

後見 工藤 寛
廣田 幸稔
田村 修

地謡

見越 文夫
山田 純夫
元吉 正巳
宇高 通成
坂本立津朗
今井 清隆
田中 敏文
今井 克紀

附祝言

第三十四回 明治神宮薪能番組

平成二十七年十月十二日(月・祝) 午後六時開演
 明治神宮拝殿前
 (雨天の時は明治神宮会館)

解説 武蔵野大学 名誉教授 増田正造

火入れ式

東京国立博物館 名誉館長 佐藤 禎一
 株式会社 安藤・岡 代表取締役会長 小野 俊雄

仕舞
道明寺
山姥

武田 宗和
 観世 芳伸
 上田 彰敏
 浅見 重好
 関根 知孝
 清水 義也

狂言
止動方角

シテ 大蔵吉次郎
 アド 大蔵 教義
 アド 善竹 十郎
 アド 上田 圭輔
 後見 宮本 昇

能
羽衣

シテ 観世 清和
 ワキ 森 常好
 和合之舞 ワキフレ 館田 善博
 ワキフレ 森 常太郎
 大鼓 亀井 広忠
 小鼓 観世新九郎
 笛 一噌 隆之
 大鼓 観世 元伯

附祝言

後見 坂口 貴信
 武田 宗和
 地謡 関根 祥丸
 角 幸二郎
 野村 昌司
 藤波 重彦
 浅見 重好
 観世 芳伸
 岡 久広
 関根 知孝

第三十五回 明治神宮薪能番組

平成二十八年十月十日(月・祝) 午後六時開演
 明治神宮拝殿前
 (雨天の時は明治神宮会館)

解説 武蔵野大学 名誉教授 増田正造

火入れ式

東京国立博物館 名誉館長 佐藤 禎一
 株式会社 安藤・岡 代表取締役会長 小野 俊雄

素謡
翁

金春 憲和
 本田 布由樹
 中村 一路
 高橋 忍
 吉場 廣明
 辻井 八郎

狂言
二人袴

シテ 山本東次郎
 アド 山本 則俊
 アド 山本 則秀
 アド 山本 凌太郎

能
鞍馬天狗

シテ 金春 安明
 ワキ 森 常好
 ワキフレ 館田 善博
 ワキフレ 森 常太郎
 大鼓 安福 光雄
 小鼓 鶴澤洋太郎
 笛 観宅 聡
 山本 則孝
 山本 則重
 若松 隆

附祝言

後見 本田 芳樹
 櫻岡 金記
 金春 憲和
 本田 布由樹
 山井 綱雄
 井上 貴覚
 中村 昌弘
 高橋 忍
 本田 光洋
 吉場 廣明
 辻井 八郎

第三十六回 明治神宮薪能番組

平成二十九年十月九日(月・祝) 午後六時開演
 明治神宮拝殿前
 (雨天の時は明治神宮会館)

解説 武蔵野大学 名誉教授 増田 正造

火入れ式

東京国立博物館 名誉館長 佐藤 慎一
 株式会社安藤・岡 代表取締役会長 小野 俊雄

素謡 翁

梅若 玄祥 山崎 正道
 地謡 川口 晃平
 角当 直隆
 小田切康陽
 松山 隆之

狂言 末廣かり

シテ 野村 万作
 アド 深田 博治
 アド 石田 幸雄
 後見 月崎 晴夫
 笛 一噌 庸二
 小鼓 親世新九郎
 大鼓 國川 純
 太鼓 小寺真佐人

能 養老

シテ 梅若 紀彰
 ワキ 宝生 欣哉
 ワキフレ 則久 英志
 ワキフレ 梅村 昌功
 大鼓 國川 純
 小鼓 親世新九郎
 笛 一噌 庸二
 山崎 友正 井上 徳治
 梅若雄一郎 角当 直隆
 内藤 幸雄 会田 昇
 谷本 健吾 松山 隆之
 後見 山崎 正道
 小田切康陽

第三十七回 明治神宮薪能番組

平成三十年十月八日(月・祝) 午後六時開演
 明治神宮拝殿前
 (雨天の時は明治神宮会館)

解説 武蔵野大学 名誉教授 増田 正造

火入れ式

東京国立博物館 名誉館長 佐藤 慎一
 株式会社安藤・岡 取締役会長 小野 俊雄

仕舞 玉之段

辰巳満次郎
 地謡 高橋 憲正
 山内 崇生
 野月 聡
 辰巳 和磨

狂言 髭槽

シテ 善竹 十郎
 アド 大藏吉次郎
 アド 善竹富太郎
 立衆 大藏 教義
 立衆 宮本 昇
 立衆 榎本 元
 立衆 上田 圭輔
 大鼓 亀井 広忠
 小鼓 親世新九郎
 太鼓 榎井 均
 一噌 庸二
 田熊 力也
 野鳥 伴仁
 大藏 基誠
 小祝 直人
 後見 善竹大二郎

能 小鍛冶

シテ 宝生 和英
 ワキ 宝生 欣哉
 ワキフレ 則久 英志
 白頭 善竹大二郎
 大鼓 亀井 広忠
 小鼓 親世新九郎
 太鼓 榎井 均
 一噌 庸二
 山内 崇生
 金井 賢郎
 野月 聡
 辰巳 和磨
 金井 雄資
 金森 隆吾
 辰巳満次郎
 大友 順
 高橋 憲正

附祝言

第三十八回 明治神宮新能番組

令和元年十月十四日(月・祝) 午後六時開演
 明治神宮拝堂
 (雨天の時は明治神宮会館)

解説 武蔵野大学 名誉教授 増田 正造

火入れ式
 東京国立博物館 名誉館長 佐藤 禎一
 株式会社 安藤・岡 代表取締役社長 福富 正人

舞囃子 養老
 香川靖嗣 大鼓 柿原 光博 大鼓 金春 國直
 小鼓 嶋澤洋太郎 笛 一噌 隆之
 友枝 真也 内田 成信
 金子敬一郎 中村 邦生
 佐々木多門 友枝 雅人

狂言 末広かり
 シテ 野村又三郎 アド 野村 信朗
 アド 野口 隆行 後見 奥津健太郎

大鼓 佃 良太郎 大鼓 金春 國直
 小鼓 嶋澤洋太郎 笛 一噌 隆之

仕舞 田村
 シテ 友枝 昭世
 ワキ 森 常好 大鼓 柿原 光博 大鼓 金春 國直
 フキアレ 館田 善博 小鼓 嶋澤洋太郎 笛 一噌 隆之
 ワキアレ 梅村 昌功

羽衣
 シテ 友枝 昭世
 ワキ 森 常好 大鼓 柿原 光博 大鼓 金春 國直
 フキアレ 館田 善博 小鼓 嶋澤洋太郎 笛 一噌 隆之
 ワキアレ 梅村 昌功

能 枕蓑童
 シテ 友枝 昭世
 ワキ 森 常好 大鼓 柿原 光博 大鼓 金春 國直
 フキアレ 館田 善博 小鼓 嶋澤洋太郎 笛 一噌 隆之
 ワキアレ 梅村 昌功

後見 中村 邦生 大島 輝久 狩野 了一
 友枝 雄人 地謡 金子敬一郎 栗谷 能夫
 内田 成信 香川 靖嗣
 佐々木多門 長島 茂

附祝言

鎮座百年祭奉祝 第三十九回 明治神宮新能番組

令和二年十月十八日(日) 午後六時開演
 明治神宮本殿(外拝殿)

火入れ式
 東京国立博物館 名誉館長 佐藤 禎一
 株式会社 安藤・岡 代表取締役社長 福富 正人

狂言 福の神
 シテ 山本東次郎 アド 山本泰太郎
 アド 山本凜太郎

地謡 山本 則重
 山本 則俊
 山本 則秀
 後見 山本 則孝

能 猩々
 シテ 金春 安明 大鼓 國川 純 太鼓 桜井 均
 ワキ 坂田 謙吉 小鼓 大倉源次郎 笛 松田 弘之

後見 金春 憲和 井上 貴寛
 本川 芳樹 辻井 八郎
 地謡 高橋 忍
 山井 綱雄 本田布由樹

第四十回 明治神宮薪能番組

令和三年十月十一日(月) 午後六時開演
明治神宮本殿(分拝殿)

火入れ式

東京国立博物館 名誉館長
株式会社 安藤・岡 代表取締役社長

佐藤 慎一
福富 正人

翁

親世 清和
三番三宅 近成
千歳親世 淳夫

大鼓 榊原 光博
小鼓 大倉 伶士郎
三味 大倉 源次郎
笛 田邊 恭資

善松 田弘之

後見 上田 公威
武田 宗和

久田 勲吉郎
関根 祥丸
武田 宗典
清水 義也

角 幸二郎
関根 知孝
浅見 重好
三宅 右近
前田 晃一

祝言之式
親世 鏡之丞

高砂

森 常好

大鼓 榊原 光博
小鼓 大倉 源次郎
太鼓 小寺 真佐人
笛 松田 弘之

館田 善博
梅村 昌功

後見 谷本 健吾
清水 寛二

井上 裕之真
安藤 貴康
坂井 音晴
本月 宣行

角 幸二郎
西村 高夫
岡 久広
浅見 重好

第四十二回 明治神宮薪能

令和四年十月十日(月) 午後六時開演
明治神宮本殿(分拝殿)

火入れ式

東京国立博物館 名誉館長
株式会社 安藤・岡 代表取締役社長

佐藤 慎一
福富 正人

狂言

福部の神

シテ 山本 東次郎

アト 山本 則孝
アト 山本 凛太郎

山本 泰太郎
山本 則重
山本 則俊
山本 則秀

笛 松田 弘之
小鼓 大倉 源次郎
大鼓 榊原 弘和
太鼓 吉谷 潔
後見 若松 隆

能

後ツレ 藤 寛
前ツレ 宇高 徳成

シテ 金剛 永謹

加茂

ワキ 森 常好

ワキツレ 館田 善博
ワキツレ 梅村 昌功

間

山本 則重

大鼓 榊原 弘和
小鼓 大倉 源次郎
笛 松田 弘之

後見 廣田 幸稔
豊嶋 幸洋

湯川 稜
坂本 立津朗
元吉 正巳
田村 修

今井 克紀
金剛 龍謹
今井 清隆
廣田 泰能

明治神宮薪能上演曲一覽

※主な出演者のみを掲載。詳細は年度別番組総覧を御覧下さい。

回数	年月日	曲名	シテ	ワキ	アイ	笛	小鼓	大鼓	大鼓	備考
第1回	S 57・11・3	翁 福の神 石橋 大獅子 (半能)	金春信高 山本東次郎 (三番二)	山本東次郎 山本則直 観世喜之	観世喜之	観世喜之	観世喜之	観世喜之	観世喜之	
第2回	S 58・10・10	羽衣 替之型 棒縛 葵上 梓之出 枕慈童 鎌腹 紅葉狩	金春信高 野村万作 観世元正 宝生英雄 大藏彌太郎 喜多長世	観世元正 野村万作 観世元正 宝生英雄 大藏彌太郎 喜多長世	観世元正 野村万作 観世元正 宝生英雄 大藏彌太郎 喜多長世	観世元正 野村万作 観世元正 宝生英雄 大藏彌太郎 喜多長世	観世元正 野村万作 観世元正 宝生英雄 大藏彌太郎 喜多長世	観世元正 野村万作 観世元正 宝生英雄 大藏彌太郎 喜多長世	観世元正 野村万作 観世元正 宝生英雄 大藏彌太郎 喜多長世	
第3回	S 59・10・10	雪 雪踏之拍子 蚊相撲 船弁慶 小袖曾我	金剛巖 野村万之丞 金春信高	野村万之丞 金春信高	野村万之丞 金春信高	野村万之丞 金春信高	野村万之丞 金春信高	野村万之丞 金春信高	野村万之丞 金春信高	
第4回	S 60・10・10	末広 殺生石 女体 巴 (半能) 井杭 小鍛冶 白頭	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世 金剛巖 和泉元秀 和泉元彌 宝生英雄 (前) 宝生英照 (後)	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世 金剛巖 和泉元秀 和泉元彌 宝生英雄 (前) 宝生英照 (後)	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世 金剛巖 和泉元秀 和泉元彌 宝生英雄 (前) 宝生英照 (後)	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世 金剛巖 和泉元秀 和泉元彌 宝生英雄 (前) 宝生英照 (後)	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世 金剛巖 和泉元秀 和泉元彌 宝生英雄 (前) 宝生英照 (後)	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世 金剛巖 和泉元秀 和泉元彌 宝生英雄 (前) 宝生英照 (後)	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世 金剛巖 和泉元秀 和泉元彌 宝生英雄 (前) 宝生英照 (後)	
第5回	S 61・10・10	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世	
第6回	S 62・10・10	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世	観世清和 観世芳宏 大藏彌太郎 喜多長世	
第7回	〈昭和天皇病臥折節を慎しみ薪能中止〉									
第8回	H 1・10・10	鶯 靉猿 菊慈童 遊舞之楽	観世清和 山本東次郎 宝生英雄	観世清和 山本東次郎 宝生英雄	観世清和 山本東次郎 宝生英雄	観世清和 山本東次郎 宝生英雄	観世清和 山本東次郎 宝生英雄	観世清和 山本東次郎 宝生英雄	観世清和 山本東次郎 宝生英雄	

回数	年月日	曲名	シテ	ワキ	アイ	笛	小鼓	大鼓	太鼓	備考
第9回	H 2・10・10	翁 三本柱 絵馬	喜多六平太 大藏彌太郎(三番二) 大藏彌右衛門 金剛巖	鏑木岑男		藤田大五郎 中谷明	鶴澤寿 宮増純三	柿原崇志 大倉正之助	金春國和	鎮座七十年大祭奉祝 記念
第10回	H 3・10・10	自然居士 乱 茸	金春信高 野村万之丞 宝生英照	鏑木岑男 宝生閑	野村良介	中谷明 藤田大五郎	鶴澤寿 宮増純三	柿原崇志 佃良勝	観世元信 観世元信	雨天のため明治神宮 会館にて開催。
第11回	H 4・10・10	羽衣 盤渉 附子 天鼓 弄鼓之舞	金剛巖 野村万作 片山九郎右衛門	工藤和哉 宝生閑	野村武司	藤田大五郎 一噌幸政	宮増純三 鶴澤寿	安福建雄 亀井忠雄	観世元信 大江照夫	
第12回	H 5・10・10	鷺 棒縛 黒塚 雷鳴ノ出	喜多六平太 山本則直 金春信高	宝生閑 鏑木岑男	山本則直 山本則俊	藤田大五郎 中谷明	幸義太郎 鶴澤寿	佃良勝 亀井実	観世元信 大江照夫	雨天のため明治神宮 会館にて開催。
第13回	H 6・10・10	素袍落 船弁慶 後之出留之伝	茂山千之丞 宝生英照	鏑木岑男	山本則俊	中谷明	鶴澤寿	柿原崇志	観世元信	
第14回	H 7・10・10	萩大名 紅葉狩 紅葉ノ舞 群鬼ノ伝	野村万蔵 金春信高	鏑木岑男	野村良介	一噌庸二	宮増純三	國川純	金春國和	
第15回	H 8・10・10	千切木 大般若	山本東次郎 観世清和(前) 梅若六郎(後)	宝生閑	山本泰太郎	松田弘之	鶴澤洋太郎	亀井広忠	観世元伯	
第16回	H 9・10・10	二人袴 土蜘蛛 千筋之伝 ささきに	野村萬斎 野村万作 金剛巖(前) 金剛永謹(後)	鏑木岑男	石田幸雄	藤田朝太郎	宮増純三	國川純	金春國和	
第17回	H 10・10・10	福の神 鶴飼	大藏彌右衛門 宝生英照	宝生閑	大藏吉次郎	一噌庸二	幸清次郎	柿原崇志	観世元伯	
第18回	H 11・10・10	清水 葛城	野村万蔵 金春安明	鏑木岑男	野村史高	藤田朝太郎	鶴澤速雄	柿原崇志	大江照夫	

回数	年月日	曲名	シテ	ワキ	アイ	笛	小鼓	大鼓	太鼓	備考
第19回	H 12・10・7	養老 水波之伝	観世清和(前) 観世芳伸(後)	森常好		一噌隆之	宮増新一郎	柿原弘和	助川治	
第20回	H 13・10・6	佐渡狐 泰山府君	山本則俊 豊嶋三千春	和泉昭太郎	山本東次郎	中谷明	宮増純三	大倉正之助	金春國和	
第21回	H 14・10・5	高砂 靱猿	宝生英照 野村万之介 野村万作	森常好	深田博治	一噌隆之	亀井俊一	亀井広忠	金春國和	シテ宝生英照に代わり、シテ佐野萌。
第22回	H 15・9・27	二人大名 金札	善竹十郎 金春安明	工藤和哉	善竹富太郎	松田弘之	亀井俊一	安福光雄	金春國和	
第23回	H 16・10・9	蝸牛 松風 戯之舞	山本東次郎 観世清和	宝生閑	山本泰太郎	一噌仙幸	北村治	亀井忠雄		雨天のため明治神宮会館にて開催。
第24回	H 17・10・10	末広かり 絵馬	野村萬 金剛永謹	村瀬純	野村扇丞	梶宅聡	曾和正博	佃良勝	小寺佐七	雨天のため明治神宮会館にて開催。
第25回	H 18・10・9	髭櫓 枕慈童	山本東次郎 塩津哲生	森常好	一噌隆之 一噌隆之	一噌隆之	森澤勇司 幸清次郎	柿原崇志 柿原崇志	観世元伯 観世元伯	
第26回	H 19・10・7	茸 自然居士	三宅右近 近藤乾之助	宝生閑	三宅近成	一噌庸二	幸信吾	國川純		
第27回	H 20・10・12	棒縛 高砂	善竹十郎 金春安明	森常好	善竹富太郎	中谷明	幸清次郎	佃良勝	観世元伯	
第28回	H 21・10・11	二人袴 三輪二段神楽 彩色之伝	山本東次郎 観世清和	村瀬純	山本泰太郎	一噌隆之	曾和正博	柿原弘和	観世元伯	
第29回	H 22・10・11	素謡 神歌 三本柱 内外詣	金剛龍謹 種田道一 野村万作 金剛永謹	高安勝久		梶宅聡	鵜澤洋太郎	安福光雄	小寺佐七	
第30回	H 23・10・9	翁 末広がり 石橋 群勢(半能)	金春安明 大藏千太郎(三番二) 大藏彌太郎 本田光洋	工藤和哉		藤田次郎	曾和正博	亀井実	金春國和	

回数	年月日	曲名	シテ	ワキ	アイ	笛	小鼓	大鼓	太鼓	備考
第31回	H 24・10・8	茶壺 船弁慶 後之出留之伝	野村萬 宝生和英(前) 辰巳満次郎(後)	森常好	小笠原匡	一噌庸二	観世新九郎	亀井広忠	徳田宗久	
第32回	H 25・10・14	玉井貝尽	塩津哲生	宝生欣哉	山本東次郎	一噌隆之	鶴澤洋太郎	亀井広忠	吉谷潔	
第33回	H 26・10・13	墨塗 井筒 物着	三宅右近 金剛永謹	宝生閑		松田弘之	鶴澤洋太郎	國川純		雨天のため明治神宮 会館にて開催。
第34回	H 27・10・12	止動方角 羽衣 和合之舞	大藏吉次郎 観世清和	森常好		一噌隆之	観世新九郎	亀井広忠	観世元伯	
第35回	H 28・10・10	素謡翁 二人袴 鞍馬天狗	金春憲和 山本東次郎 金春安明	森常好	山本則孝	槻宅聡	鶴澤洋太郎	安福光雄	桜井均	
第36回	H 29・10・9	素謡翁 末廣かり 養老 水波之伝	梅若玄祥 山崎正道 野村万作 梅若紀彰	宝生欣哉		一噌庸二	観世新九郎	國川純	小寺真佐人	
第37回	H 30・10・8	髭櫓 小鍛冶 白頭	善竹十郎 宝生和英	宝生欣哉	善竹大二郎	一噌庸二	観世新九郎	亀井広忠	桜井均	
第38回	R 1・10・14	末広かり 枕慈童	野村又三郎 友枝昭世	森常好		一噌隆之	鶴澤洋太郎	柿原光博	金春國直	雨天のため明治神宮 会館にて開催。
第39回	R 2・10・18	福の神 猩々	山本東次郎 金春安明	殿田謙吉		松田弘之	大倉源次郎	國川純	桜井均	新型コロナウイルス 感染症対策のため本 殿(外拝殿)にて無 観客開催。
第40回	R 3・10・11	翁 祝言之式 高砂	観世清和 三宅近成 (二番叟) 観世鏡之丞	森常好		松田弘之	大倉源次郎	柿原光博	小寺真佐人	新型コロナウイルス 感染症対策のため本 殿(外拝殿)にて無 観客開催。
第41回	R 4・10・10	福部の神 加茂	山本東次郎 金剛永謹	森常好	山本則重	松田弘之	大倉源次郎	柿原弘和	吉谷潔	新型コロナウイルス 感染症対策のため本 殿(外拝殿)にて無 観客開催。

増田正造氏追悼



現代能楽と増田正造さん

竹本 幹夫

増田正造さんは現代能・狂言の研究者として生涯を全うされた。活躍の場は主に能楽評論の世界で、能楽の紹介・解説に関して数々の著作がある。しかしそればかりではなく、岩波書店日本古典文学大系百巻中の白眉である『謡曲集』付録の「諸役出立図」はその労作であるし、『能と近代文学』（平凡社一九九〇年）のような硬派の研究書をもものさされている。武蔵野女子大学（現武蔵野大学）教授として、現代能楽資料を網羅的に保存収集して公開する、同大学能楽資料センターを創立されたことも忘れがたい。

能楽の歴史的研究が学界の潮流であった時代には、増田さんの研究に対して学界はやや冷ややかであった。しかし二十一世紀を迎えると、増田さんの成し遂げてきた仕事の重要性が多くの研究者にも理解されるようになった。能・狂言研究が、中世文学分野にほぼ限定されていた二十世紀に比して、研究領域が近世・近代にまで大きく広がり、研究方法も文学的・歴史的研究から技法・演出研究や舞台研究へと拡大したことが、これに与っていろいろ。その研究姿勢は、今や多くの若い研究者に共有されつつあるのである。増田さんの魂は今も現代能楽と共にある。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。（早稲田大学名誉教授）

増田正造先生を偲んで

リチャード・エマート

日本では一九六〇～一九八〇年代、能楽が一つの全盛期であったように私にはみえる。能楽公演が大幅に増加し、薪能の人气が高まり、能楽に親しむ人口が増えた。能楽団体が海外で公演したり、能楽師個人が海外で教える機会も増えていった。国内では日本人の弟子はむろん、外国人の弟子も増えた。私もその一人だった。

出版界でも能楽研究本や能楽ファン向けの解説本が多数出版され、雑誌では能楽の特集が生まれ、能面や能装束の写真集も書店でよく見られるようになった。

増田正造先生はこうした流れの真ん中に立っていた。いや、立っていたのではなく、流れとともに走り、より力強い流れをつくられた。

増田先生は玄人の演者ではなかったが、能楽を広範な人々に紹介する玄人だった。数十冊の解説本の執筆、薪能や映画のプロデュース、テレビ解説……。ご自身が撮った写真で写真集も上梓し、能面の作り方の執筆から能囃子の録音と解説にまで携わった。一九七二年には近現代の能楽研究を目的として武蔵野大学能楽資料センターを設立された。増田正造先生が能楽の世界にもたらした影響ははかりしれない。

そして、先生が私を含めて外国人の能楽研究に向けたやさしいまなざしのおかげで私自身の今もある。

（武蔵野大学名誉教授）

好奇心あふれるパイオニア

小田 幸子

はじめて読んだ増田正造氏の著書は『能の表現——その逆説の美学』（一九七一年中公新書）である。能と言えば「古くさい」という印象が当時一般的だった。ところがこの本に書かれている能は、古くさいどころか、演劇とアートのトップランナーのようにカッコ良かった。短い章が幾つも列なつた文体はキャッチフレーズの万華鏡のように輝かしく、増田氏の斬新な見方に導かれて、能の世界に足を踏み入れた初心者には少なくなかったと想像する。以後、『能のデザイン』『能百番上下』『能の歴史』など御自身の撮影になる写真を多数掲載した入門書の出版があいついだ。作品の本質にずばりと切り込む文章と、自在なカメラアングルが捉えた能の姿がいまって、今読みかえしてもみずみずしい。

武蔵野（女子）大学と同能楽資料センターに勤務していた頃親しくおつきあいする機会を得たが、「五十歳過ぎてから毎年一つ新しいことをはじめているんだ」と楽しそうにおっしゃっていたのが印象深い。写真やワープロや映像やレコードやバリ演劇など活動域は広いが、根底には「能への愛」があった。氏のたえざる好奇心が、能を新しい地平に連れ出す原動力となったのだと思う。観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞した『能と近代文学』（一九九〇年平凡社）はその結実である。

（能狂言研究家）

増田正造先生を偲んで

河鍋 楠美

私は幕末から明治前半にかけて活躍した絵師・河鍋暁斎（一八三二～一八八九）の曾孫の河鍋楠美と申します。暁斎の娘で私の祖母の河鍋暁翠（一八六八～一九三五）は同じく日本画家でしたが、その娘である私の母は小学校の教師に、私は眼科医となり、埼玉県蕨市で五十七年間院長を務めました。

暁斎は存命中には欧米諸国にも名を馳せましたが、特に太平洋戦争後は忘れ去られたことから、私は暁斎と暁翠の顕彰のため、昭和五十二年（一九七七）に財団法人河鍋暁斎記念美術館を創設しました。その後、暁斎が大蔵流を学び舞台上に立ったこともあること、暁翠も能狂言に造詣が深く、ともに能狂言の肉筆画や版画を多数描いたことがわかってまいりました。能狂言に不案内だった私は、昭和五十六年（一九八一）十二月六日、増田正造先生を当館での研究会にお招きし、暁斎画『能画図式』の意義や斯界に伝わる暁斎の逸話をご講演いただきました。さらに昭和六十年（一九八五）には、暁斎画『能画図式』と暁翠画『能楽図絵』の影印・復刻本を自費出版するにあたり、演目の解説をご執筆いただいた次第です。増田先生に様々なご教示を賜りまして暁斎の顕彰が進みましたことを御礼申し上げますとともに、謹んでお悔やみ申し上げます。

（公益財団法人河鍋暁斎記念美術館理事長・館長）

増田正造先生を偲んで

小林わかば

長年、私にとって増田正造先生は能の偉い先生、遠い存在だった。

そんな先生と直接お話をするきっかけになったのは『花もよ』四号に観世寿夫『邯鄲』のCDを付けたこと。次の五号（二〇一三年一月一日号）に観世寿夫についてご執筆頂き、お付き合いが始まった。

先生の著作『能と近代文学』（一九九〇年平凡社）刊行以降、現在までの補遺を網羅したいと『花もよ』で連載した「検索・能と近代文学」。関係ありそうな本が見つければすぐに発注され、とにかく仕事が早く、追求心とパワーが凄まじかった。

先生は「能」に関わるTV映像を収集していて、ドラマなど些細なシーンも逃さず保存されていたが、実は大好きな「猫」の映像も収集されていた。

猫好き繋がりで、富士サファリパークのライオンの赤ちゃんをだっこ出来るイベントにお誘いしたら喜んで下さり、先生は買ったばかりの小型4Kカメラの試運転とライオンの赤ちゃんを撮影しまくり。

「能と俳句」という連載の話があり、さらに「狂言と俳句」、「黒川能と俳句」も下書きありと話されていたが、すべて幻になってしまった。

十年にも満たない期間だったが、随分親しくさせて頂いた。増田先生ありがとうございました。（『花もよ』編集長）

増田正造先生を偲ぶ

林 和利

「高濱虚子の俳句の中から、能・狂言に関係する作品を抽出してほしい」と、増田先生からご依頼があった。五年ほど前のことである。

近代文学における能・狂言の影響を総合的・網羅的に究明するのが、先生の大きな研究テーマであった。その成果は、大著『能と近代文学』（平凡社一九九〇年）ですでにまとめていらっしゃるのだが、その補遺編を俳句に絞って企図されていたのである。

先生はその素稿執筆に着手なさっており、書き出しの何枚かを私に送信してこられた。畏れ多くも私に推敲を求めていることであったが、その分野が専門でない私には荷が重すぎる仕事で、はかばかしいお返事はできないままであった。

先生はいくつかのめばしい出版社に、その企画の交渉も進めていらっしゃったが、それが実現しないうちに急逝されたのは、いかにも惜しまれてならない。ただし、虚子の俳句から抽出した能・狂言関係の作品一覧は、私が代表を務める東海能楽研究会の『年報』第二十四・二十六号に掲載させていただいた。先生から受けた数々の学恩の、顕著な一例である。

（伝承文化研究センター所長）

「無形の美」の本質を見抜く

藤本 草

横道萬里雄先生監修のLPレコード「能」(一九六三年度文化庁芸術祭大賞受賞)に進行役として携わられた増田正造先生は、その十年後、金春惣右衛門先生と共に、絶後の名盤「能楽囃子体系」(七三年度同賞受賞)の監修・解説を務められます。以来、盟友となった波多一索ビクター学芸部長との名コンビでは、「観世流 舞の囃子」(七六年)、「砧/羽衣」観世寿夫」(八二年)など能の貴重な音源記録を次々とレコード化して世に送り出します。

数多の名人の揺るぎない圧倒的な生の舞台の数々に接した増田先生は、無形の美の本質を見抜く、まさしく稀有な存在でした。そして「秀逸な過去の音色は、未来への啓示にほかならない」との視座から、増田先生は異端ともいうべき「能の今を記録する人」を、終生身を以て任ぜられました。

そんな増田先生が、芸能の島バリの「自然と文化と芸能と人々の暮らし」に魅せられます。九十年代から十余年間にわたって、村々のみならず空から海中まで自ら撮影されたドキュメンタリー「バリ島まるかじり」(DVD、二〇一二年)は、「能を見る目」でバリを記録した、イメージの連鎖が紡ぎ出す映像詩です。増田先生が終生透徹された無形の美への探求が、そこに結実しているように私には思われてなりません。今、溢れる感謝の念とともに、在りし日の酒席のお姿がここから懐かしく思い出されます。

(公益財団法人日本伝統文化振興財団顧問)

増田正造先生

高橋 忍

また一人お能を愛してやまない方が突然星へと旅立たれましたこと、残念でなりません。

金春流とは縁が深かったお陰で、先生との出会いは四十年以上前になります。いつもお洒落なスーツとお帽子。そして大きな眼鏡。背筋も伸びて本当に素敵な紳士でおられましたね。薪能などでの解説、解りやすくゆつくりとした口調。真似ようと思っても到底真似出来るものではありませんでした。解説冒頭の導入にお話される多岐にわたる内容。政治、スポーツ、お笑いなど全てのジャンルに精通されており驚かされました。もちろんお能の知識はずば抜けておられ、何の資料もご覧にならずとも、各流儀の違い、小書(特殊演出)についても即答されていました。

また早くからお能を、映像で残す作業をされていました。新しい機種が出るといち早く入手され、「今日はこのカメラを試すのだ。」と嬉しそうにお話されていたこと、昨日のことのように思い出されます。

今頃は懐かしい先生方と能楽談義で盛り上がりつつおられることでしょうか。

これからの能楽、どうか遠い星から見守っていて下さいね。

合掌

(シテ方金春流能楽師)

マスダ記念日

見玉 信

私が謄本書肆檜書店に入社したのは昭和四十七年（一九七二）十二月だった。「月刊 観世」の編集部配属されて編集者としてのスタートを切ったのだが、当時の増田さんは『能の表現―その逆説の美学―』（中公新書）を上梓して間もない頃で、気鋭の論説には大いに啓発された。

昭和六十一年、私は増田さんに連載をお願いする。それが六月号から始まった「近代文学と能」である。「固い題目ながら、映画や映像、劇画の世界まで話題をひろげてともいふ編集部に加え、能の世界がお茶の間のブラウン管にまでしばしば登場する時代の波を視野の端に置きつつ…」と増田さんが書いている。楽しい仕事だったが、多忙を極める増田さんなので原稿は中々出来上がってこない。ファックスで催促するのも茶飯事だった。そういう中で、

この原稿を送ってくれると言ったから七月三十一日はマスダ記念日 おがわ まち

などという珍歌も出来た。昭和六十二年五月に初版が出た俵万智の第一歌集『サラダ記念日』（河出書房新社）をもじった。檜書店は神田小川町にあり、田原町は我が出沒地帯。これを増田さんはすごく喜んだ。一期の思い出である。

平成元年まで続いた「近代文学と能」は、単行本『能と近代文学』（平凡社）の母胎となった。増田さんに頂戴した、編集者としての勲章と想っている。（藝能学会副会長）

能の読巧者

田中 英機

増田正造先生の著作は『能と狂言―無形文化財全書3』（昭和三十四・大同書院出版）を初発に、代表作『能と近代文学』等々を経て、『世阿弥の世界』（平成二十七・集英社）に至る。

初発の前者は、増田先生二十九歳の若さ、颯爽とデビューの言説は鋭い。共著者横道萬里雄氏の煽りもあったか。遺作ともなった後者は、著者悠々自適の筆法、従前の諸論説に拘泥せず、新しい切り口をいくつも見せて、増田自在境に誘う。たとえば、こんな一節も。

「世阿弥自身『世子の位、観阿に劣りたる所有り。誰も知らず』と言っていますが、人に何故かと聞かれて、『我は足利きたるによって、劣りたるなり』と答えています。世阿弥が父に匹敵する名人であったことを裏書きしています。」（『能と狂言』）「技が効き過ぎるというのである。観阿弥を、『大万三郎』と言われた先々代梅若万三郎のような『山をも崩す』という迫力あるタイプとすれば、世阿弥は十四世喜多六平太のような、小柄で抜群な表現力を持った役者だったのであるまいか。」（『世阿弥の世界』）

増田先生の書齋と能楽堂を往還する推理推論の豊かさに、能の楽しみ方を啓発された。

観阿生誕生六九〇年、世子生誕生六六〇年の今年。

（くらしき作陽大学客員教授）

増田正造先生を偲ぶ

浦 亜希子

増田先生に初めてお目にかかったのは、二〇一七年観世能楽堂で学生時代の指導教授、田中英機先生のご紹介でした。能狂言番組のディレクターをしているため、お会いする前から先生の御著書は拝読しておりました。学識者でありながらユーモアをたっぷり交えた語り口は、能初心者だった私には大変興味をそられることが多く、勉強させていただいたのを覚えています。実際、お会いしても気さくで私のような若造にも優しくしてくださいました。

それからはよく気にかけてくださり、折々お会いしたときは、過去の名人の思い出話、現在の能楽の課題などいろいろ教えていただいたことが今も思い出されます。また、明治神宮新能実行委員会にお声かけいただき、貴重な経験をさせていただいていることにとっても感謝しております。

気取らない語り口で語られる言葉はいつも時や場所、社会に合わせて新しく更新されていたように思われます。先生は能楽を愛していらして、室町時代から脈々とつづく芸能をどう現代の芸能にしていくなか日々模索されていきました。

是風に非風を絶妙に取り入れながら「老いてのちの初心」を更新し続けられた方だと思います。合掌。

(明治神宮新能アシスタントディレクター)



増田正造氏 略歴

武蔵野大学名誉教授。昭和五年（一九三〇）一月五日東京生、早稲田大学文学部国文科卒業。大学では野村万作師と同級であった。また、金春流の櫻間弓川師に師事。東洋商業高等学校（現・東洋高等学校）教諭を経て、武蔵野女子大学（現・武蔵野大学）教授。同大学能楽資料センター設立に携わり、センター主任を務めた。

中学時代（旧制府立一中）から能とかかわり、昭和二十二年（一九四七）、能楽協会機関誌『能』の編集に携わる。三十年（一九五五）「能楽音の会らしいぶらりい」（後に「能楽音の会」と改称）を発足させて名手の至芸を録音。昭和三十四年（一九五九）観世寿夫を中心とする「華の会」に参加。昭和三十年代から四十年代にかけて、『能楽タイムズ』、『能楽思潮』、東京新聞などに能評を執筆した。昭和四十八年（一九七三）、金春惣右衛門師（二十二世）と監修したビクターレコード『能楽囃子体系』が芸術祭大賞を受賞した。そのほかにも監修・参画したレコードやビデオも多い。

著書『能と近代文学』で、第十四回観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞。日本伝統文化振興財団理事、文化庁芸術祭委員、芸術選奨選考委員、観世文庫評議員、永青文庫評議員等を歴任。

デパート等での能面・能装束展や、各地で流行の薪能・野外能のプロデュースを数多く手掛け、能楽の普及への積極的な活動を行った。ユーロパリア・ジャパン'89《展覧会・能の華》の監修・参加など、国際的にも活躍。そのほか、ワープロや文具に関する著書もある。日本写真家協会会員。

明治神宮薪能では、企画立案時より実行委員会のメンバーとして尽力し、令和三年（二〇二二）八月、永年にわたる功績を称え株式会社安藤・間より表彰を受けた。令和四年（二〇二二）三月十九日逝去、享年九十二。



（写真撮影／三上文規）

●著書

- 『能の表現 その逆説の美学』 中公新書 一九七二
- 『能楽案内』 若者のための能楽鑑賞会 一九七四
- 『能のデザイン』 平凡社カラー新書 一九七六
- 『能百番』上・下 平凡社カラー新書 一九七九
- 『なぜか嵯峨野』 桐原書店 一九八一
- 『ワープロ発想法』 平凡社 一九八四
- 『増田教授のシステム文具術工夫と失敗が楽しさの秘訣』 ネスコ 一九八九
- 『学校百科・はじめてみる伝統芸能2 能・狂言』 クロスロード 一九八九
- 『能と近代文学』 平凡社 一九九〇
- 『能百十番 能鑑賞ハンドブック』 平凡社（コロナ・ブックス） 一九九六
- 『世阿弥の世界』 集英社新書 二〇一五

●編著・共著・監修

- 『能と狂言』 横道萬里雄共著 大同書院出版 一九五九
- 『能』 撮影 金子桂三、解説 増田正造 毎日新聞社 一九七四
- 『能をたのしむ』 戸井田道三共著 平凡社 一九七六
- 『能の歴史』 小林貴共著 平凡社カラー新書 一九七七
- 『能本説と展開』 小林貴、羽田昶共著 桜楓社 一九八一
- 『華の能 梅若五〇〇年』 小林貴共編 講談社 一九八二
- 『能と狂言の世界』 小林貴共編 平凡社 一九八三
- 『井伊家伝来能面百姿』 切畑健共編 平凡社 一九八四
- 『井伊家伝来能装束百姿』 馬場あき子、大谷准共著 平凡社 一九八五
- 『黒川能の世界』 作画 渡辺睦子、解説 増田正造 平凡社 一九八六
- 『マンガ能百番』 作画 渡辺睦子、解説 増田正造 平凡社 一九八七
- 『はーいワープロ 本気で始める人の200%新活用術』 監修 主婦の友社 一九八七
- 『能面 鑑賞と打ち方』 堀安右衛門共編 淡交社 一九八八
- 『OMOTE 観世宗家能面』 監修 観世清和、写真 林義勝、文 増田正造 檜書店 二〇〇二
- 『高田明と読む世阿弥 昨日の自分を超えていく』 高田明著、監修 増田正造 日系BP 二〇一八
- 『まんがで楽しむ能・狂言』 漫画 小山賢太郎、文 三浦裕子、監修 増田正造 檜書店 二〇二二
- 『新装版 まんが能百番』 作画 渡辺睦子、解説 増田正造 平凡社 二〇〇九
- 『もっと知りたい 続まんが能百番』 作画 渡辺睦子、解説 増田正造 平凡社 二〇二二

●映像作品監修

- 『能 鑑賞入門』 サン・エデュケーションナル 二〇〇五
- 『狂言 鑑賞入門』 サン・エデュケーションナル 二〇〇五
- 『能の華』 東映シーエム株式会社 二〇一二
- 『増田教授の映像バリ島まるかじり』 日本伝統文化振興財団 二〇一三



明治神宮新能実行委員会

歴代会長

有光次郎 昭和五十七年～平成七年
犬丸直 平成八年～平成十九年
佐藤禎一 平成二十年～現在

昭和五十七年（一九八二）六月（発足時）

名誉会長	有光次郎
名誉顧問	林健太郎
名誉顧問	犬丸直
会長	本田茂
委員長	金春信高
委員	観世元正
〃	宝生英雄
〃	喜多実
〃	金剛巖
〃	増田正造

令和五年（二〇二三）四月一日現在

会長	佐藤禎一
委員	国谷一彦
〃	金春安明
〃	高橋忍
〃	田中英機
〃	児玉信
〃	明治神宮新能アシスタントディレクター 浦亜希子

あとがき

株式会社 安藤・間 顧問 福富 正人

編集委員会

児玉 信
田中 英機
三上 文規
木野 敏久
高野 健一
田川 茉莉
久松 大輔

明治神宮新能四十周年の節目を迎え、ここに記念誌を発刊できますことを心よりうれしく思うところでございます。

本誌を手に取りられた方の多くは、何故このタイミングなのだろうかと思われたものと推察するところですが、明治神宮新能は昭和五十七年に開催してから、明治神宮様や能楽関係者の皆様に支えられ、第四十一回まで無事開催してまいりました。四十年という歳月において、各流派の演者の方々も世代替わりをする中で、変わらないものが、当社協賛と、初回から番組をプロデュースされてきた武蔵野大学名誉教授の増田正造先生でしたので、先生のご逝去は誠に残念でなりません。

明治神宮新能の礎を築かれた増田先生への感謝の気持ちと、先生の思いが詰まったこれまでの新能の様子を、私たちの記憶にとどめるだけでなく正式な記録として後世に残したいとの思いから、今回の制作を企画した次第でございます。

編集にあたりましては、新能実行委員の児玉先生と田中先生、写真家の三上様として当社社員で編集委員会を設け、檜書店様のご協力の下、構想から約一年をかけて作業を行ってまいりました。このような形で冊子発刊が念頭になかったため、古い資料の所在確認や収集には編集委員もかなり苦勞してまいりました。

何分にも不慣れなため不十分なところが多々あったとは存じますが、ご出演いただいた方々のご寄稿や資料のご提供など、多くの方々のご協力ご支援をいただき、発刊に漕ぎつけることが出来ましたことを改めて感謝申し上げます。

本誌は明治神宮様へご奉納するとともに、全国の能楽施設や図書館などにも寄贈することを予定しておりますので、本誌を通じて、より多くの方に明治神宮新能を知っていただく機会になれば幸いです。

当社は今後も本協賛を継続し、日本伝統文化の承継に貢献していく所存でございますので、明治神宮新能を末永くご愛顧くださいますようお願いいたします。

明治神宮薪能四十年誌

発行日	2023年(令和5年)7月30日
発行	明治神宮薪能実行委員会
編集	明治神宮薪能四十年誌編集委員会 編集委員／児玉信、田中英機、三上文規 事務局／株式会社安藤・間
協力	明治神宮
制作	株式会社檜書店
造本・装幀	株式会社スタルカ
印刷・製本	モリモト印刷株式会社

©明治神宮薪能実行委員会 2023

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。